倭文麻環

2.3
Ub0

倭文麻環

明治
41 8 19
内交

逃情

書隱堂

善誥

思古

風雨時

松方庚壽題辭

丁未初冬海東果題

倭文麻環重野博士序

倭文麻環藩公聽政之暇文化初我藩公聽政之暇欲搜訪民間軼事命白尾國柱纂之國柱編倭文麻環十二卷以進蓋先世流風遺韻存乎鄉國者不尠哉欲聞其口碑雜記注

混淫渭國柱體旨旁搜
博集參照舊志細心遞
擇自六十臺始於忠五死
事終於溧之民採弄尚武
之風敬神之俗併歌曲
舞蹈而載之物怪人妖亡
存里老所傳不敢罪疑

而卷中揷敘事之生動感
莫非寓諷規之意焉其
詳見于自序茲國柱文武材臣
學兼內外淺費古今於武
乎一邦所著有神代三陵
考慶筵名勝考等斯
編雖其佚餘亡可以窺其

慕君愛國うく矣公家
欲刻以問世徹序安繹乃
弁一言國以相世系數歷詳
于長瀬真幸而撰墓碑
明治丁未十二月

文學博士重野安繹書

伊藤義安刻

倭文麻環の序

今ならし長閑なる御代の恵みに春の花咲きにほひいとやむごとなきころほひなるべし平城の京の古うたに倭文手纏いやしき吾ども𤍠づ手巻數にもあらぬなどあるを古今の頃にはやがて倭文麻環など詠みつゞけ來りぬ𤍠づたまきとは賤てふことはいはむ冠辭なりこも枕高みくらぬに在して天さかる鄙の小事視さむとては其國風を聞こしめしそがことわざをも獻らせ給へりしこそ上れる世のならはしになむそのよしは朝政に臨み給ふにも目に見えけるは限りあるものなれば八十の隈路に八十武士が物せるをことゞくに詳には知らしがたしましてには事とるつかさ人も畏みおそれて浪華のよしあし一節あるきはゞ敢て白しまねらせがたくなんあるむかし文化のはじめ東の御舘にて今も見ついに

しへも聞えたるをこの事わざとも書つゞりて暫時の御もて遊びに備へまつれとかしこき仰承りし時石の上舊きを尋れ鱸の口の廣く世に傳へてしくさ〴〵漢はどりあやしき怪談ごとまで賤しきふづが利鎌もて刈り集めつゝ畫に寫し筆に染て上りしそは丙寅の火にやけ失せたればこたび其案文しもうつし取りてたてまつるべきよしこぞの臘の半に上村大人もて內のおほむ旨を傳へさせ給ひけるされどふぎの羽れかきしばなく間なく鳥が鳴く東の遠つ官こにまういで給ひなむとす摟なへてふた月にもたらはぬ曆殘り少なくいかで和泉の杣の宮木かずおほく引きいでゝ秋の花野の色々に摘みわけ濱千鳥の跡さだかにはつられ侍るべきぞほれなきみゝずのみずかきの畫にこれぞとなしぬるもかれにては力なきかへるの人まれに書誤りなどしその事狀は撰みすみしも

その圖畫のまだ書終らざるものいと澤なりふかのみならず前つ代の御名などのうち當時のまゝをもてしあるはその御諱もて記して刈菰のみだりにみえしふげ糸の紛らはしきふしぐ〳〵なほ多かりきそは皆其傳へふみのまゝなるぞかしされればあはれさもをかしさもたど〳〵しき拙き言の葉いやしきわざどもを玉くし筒ふたゝびくり返してはゞかりの關をも忘れて上れるゆゑこのひと巻をばふづのをた巻となむ假に名づけつゝ上村うしについて御はしの下にさゝげ侍ることいゝはなりぬことし文化の九とせ氣更來の朔日うやまひてふるしけり

藤原國柱

新刊倭文麻環例言

一此書は著者白尾氏の自序に據れば文化の初其の江戸藩邸に在りし時公命を奉りて撰進せしに同三年三月藩邸の火災に燒失せたりしかば再び之を徵せられしにより更に修訂して上りたるなり

一此書は序文に今も見つ古も聞えたるをこの事業とも書つづりて暫時の御もてあそびに備へまつれとかしこき仰承り云々とありて素と後庭燕閑團欒の談柄にと物せしがゆゑ多く異聞怪說を蒐め且つ繪畫をも雜へて耳目を悅ばしむるを事とせり然るに著者は博覽强記にして學識高く文藻に富めれば荒唐の中に故實を叙べ詼諧の間に規諷を寓し橫說竪說趣味窮まりなく考古博物の資糧とすべき事又甚だ多し誠に說部の最良なる者なり

一此書は夙くより藩内に風行し展轉鈔寫を經たるが故從て誤謬少なからず今一の校正本を獲て更に審訂を加へたれど猶ほ間々疑はしき處あり姑く原文に從ひ妄りに之を改めず讀者請ふ之を諒せられよ

一白尾氏の墓は鹿兒島市南林寺にありて肥後の人長瀬眞幸の碑文を刻せり今其の全文を錄取して左に揭載す以て其生平の概略を知るべし其の著述は本書の外碑文に擧げたる神代三陵考と麑藩名勝考最も世に著はる又成形圖說の編纂にも與かりて力ありしと云別に南島考の著ある由本書に見えたれど世に傳はれりや否や知り難し猶ほ搜索すべし

明治四十年十二月

校者識

白尾齊藏國柱享年六十歲

千秋亭皷泉瑞楓大居士墓

文政四年辛巳二月十五日終

瑞楓翁名者國柱、氏者白尾、藤原與理出多利、世々薩摩人也、父者本田親昌、母者坂本氏、寶曆之十餘二年登云志年之八月能五日廼日爾生利祁流乎、寬政乃二年登云志年爾、白尾國倫爾養波禮豆、其家乎繼理伎、其家槍由氣乎傳豆師多利、翁自習而其術乎窮人爾教豆盡世理伎、又少加利志與利讀書事乎好、　皇國學乎伊蘇志美而、發明世流說多利伎、享和乃元年、國史館爾進美、數年大江戶能大城乃下爾往來而、芝廼御館爾宿直志、其君之命乎奉豆、書數卷乎著氏上良禮伎、又神代三陵圖、暨其來由記乎上良禮祁禮婆、君神代之靈蹤乃荒廢奈牟事乎恐美給比豆、藩籬脩治、新

爾鳥居下馬碑乎建佐世給布、故翁乎遣而、其陵等乎撿世給倍利伎、於是悉巡見弖、委曲爾考定而、圖四卷乎作氏上良禮伎、抑神代之三陵乃地、古史典等爾載弖者有杼雲、離遐伎境爾斯有祁禮婆、於保々志久弖乃美有計流乎、今如是考定良禮弖、千五百世能末前弖、其地之佐阨加爾斯爪久成奴留波、全翁之功爾曾有祁流、如是弖、文政乃二年登云志年爾、史館乃事奉利行布職登成、同三年登云志年爾、步卒長登成弖、其五月爾奈毛、國幣歸良禮祁流乎、病阿都久志弖、同四年登云志年乃二月之十餘五日廼日爾奈毛、六十能齡爾弖、身罷良禮計留、鹿兒島之南奈流、松原山之南林寺之其祖之於久都伎乃側爾葬奴、翁其行惇爾正久、其言信有弖、奉仕爾伊佐乎斯久、心波多美也備弖奈毛有祁流、然也者文道爾、武事爾、大丈夫之清伎其名乎、不朽石爾彫弖、萬世爾語繼萬久須登之弖奈毛、眞子之國寶乃許與理請於古佐禮多流、阿波禮、此伊斯布美與、眞幸前爾江戶爾弖、始氏逢在計留時、翁之豫請在祁流乎、宇倍那比都々有計禮婆、在世之契約乃其波加奈久悲久弖、則其文作氏書氏遣留爾奈毛在祁流

牟加斯伎美、登古波能毛美知、登古登波爾、知良奴古々呂乃、多禰也宇惠計武、時者文政五年登云年廼後乃正月乃末都迦多

肥後國熊本　長瀨眞幸

倭文麻環卷之一

目次

長壽院盛淳冐二公諱一幷關ヶ原軍談ノ
川上久雅贈二辭世歌於故郷一
大口壯士到二山神幽居一

倭文麻環巻之一

長壽院盛淳冒公諱幷關ヶ原軍談

古語に曰眞澄鏡の清明なるがごとく天下を照臨し眞赫玉の微妙なるがごとく生民を仁愛し草薙劍の精利なるがごとく四方を撥鎭玉へと申ける上に立座在けん止事なき御身は智勇仁愛の明德備はらせ給ふうちにも眞澄鏡の妍媸を影に寫して照し視はすごとに人の賢愚を知しめして官を授け職を任じ玉ふ事こそ專には難有わざと申なれされば朝に惡人の立ことなく野に遺賢の弃らるゝ事なく驕吝を誡め儉素を尙び下情をして上達せしむるは則人君の大量にして治國の至要此數件には過ざりけり抑又臣の君に於る從容として義に就て烹らるゝを俟ち大節に臨て其志を奪ふべからざるものあり我朝楠中將宋の文天祥蓋その人なり紀信が漢の高祖に

代り村上義光の護良親王に死するが如き皆危を見て命を授け難に靖し國に報ゆ其他健將武夫の謀を善して敵を料り擢陷廓清の功孟賁羽飛の勇歷世比々として毛擧すべからず然こいへども多くは人主暗愚にして廟謨信用せられず千載の本をして空く其時の不幸を憾るもの幾ぞや惟ば本藩古來忠臣義子其門に輩出する固より代々其人に乏からず島津典厩の廻に陣沒し畠山盛淳關ヶ原に戰死す世以美談とす而して典厩は宗室の親臣にして盛淳は社稷の名臣なり其來處進退固より其分といへども淳の　先君におけるは先君の淳を知ることの明なるに出たり初　先君淳を圓首方袍の中より拔擢て即監臨の大任を授く而して　宰相侯關ヶ原の役實に危急存亡の秋なり　侯百里使を遣して我臣庶を喚に獨手書して淳を召す他人は則これを閣く此其倚重せらる亦知べし淳

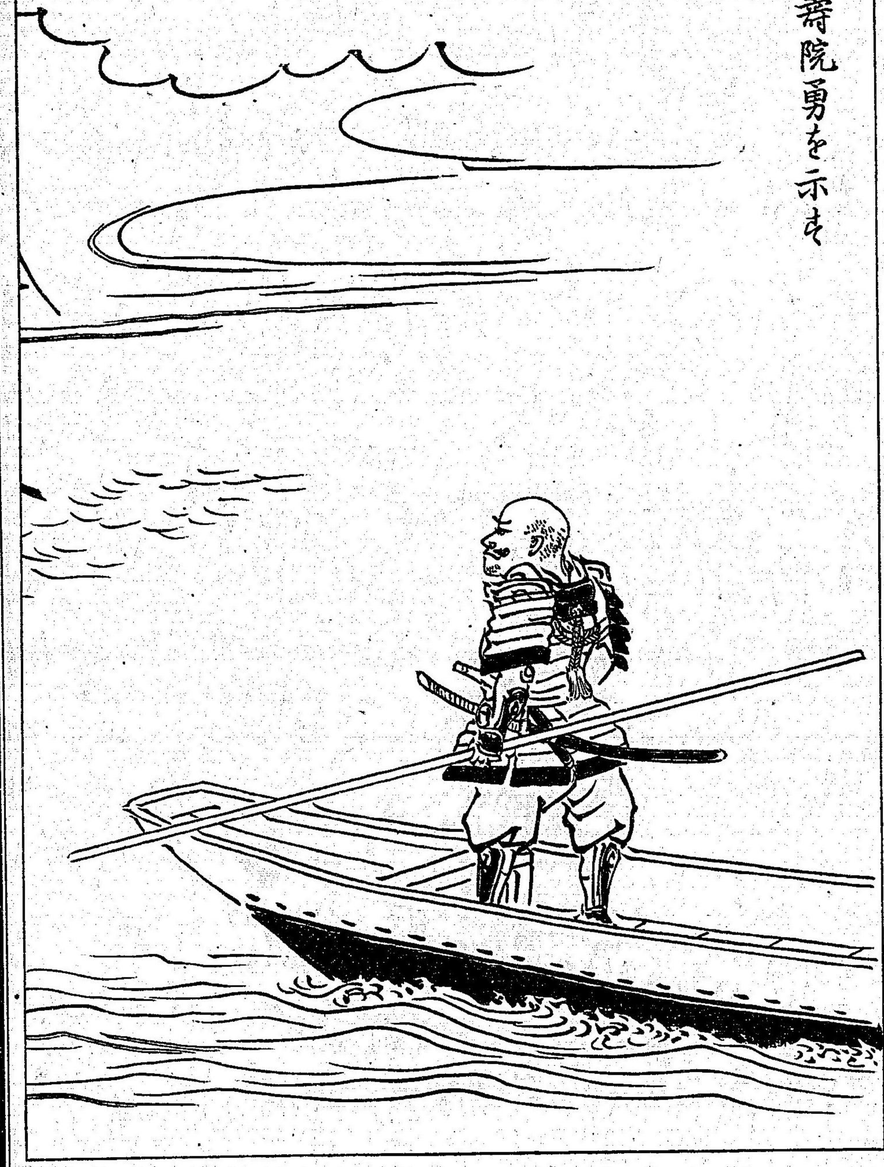
果して忽々として日夜兼行き僅に大軍將に擧んとするの前夜　侯に見ることを得たり亦天なる哉終に身を殺して國に當り　君侯生平顧託知己の恩に負かず是人主其臣を知ること明にして臣亦其君を相て不朽の忠勳を顯す所以なり吾聞く長壽院盛淳は其父を畠山中務少輔賴國と云足利將軍天下の權を握るや畠山細川斯波を三管領職と號して幕府の政務を掌れり然るに享祿天文の交に及て足利の武威漸く衰へ天下の諸侯互に奪攘呑噬す三好が黨松永彈正と倶に謀叛を起し足利家十二代の將軍義輝を弑しまゐらせければ三管領も散々に式微て畠山賴國は近衞殿下の御取持にて薩藩に下向し三位義久侯に寄客となりて頗る田宅を賜りける賴國に一女一男ありしつら〳〵世の行末を顧るに我はもと足利公室の重臣として時の不幸に遇ふて遠く西海の浪に沒落せり我

子孫をして永く卒伍の臣となさしめ事二の辱を後葉に貽さましかば何の面目ありてか祖宗に地下にまみゆべけんや寧我子孫無らんにはしかじとて混ら侯に請て田園家財を盡く阿多某に讓りあたへ一女一男共に出家させて自は橘隱軒とぞ號れ（なの）けるは橘隱軒は玉龍山の西千手堂の右側に輓近常榮軒と改むは常榮は頼國の法諱なり頼國後には坊津一乘院の山中隱居し彼地にて卒去す其墳ふといふ處に有と

一男は大乘院主盛久法印が門に投じて薙染す即盛淳なり人となり純粹の性を含て氣象甚だ雄偉なり故に浮屠の教を受といへども未曾て箕裘の業を忘れず常に報國の志を抱けり年既に長じて錫を上方に飛し雲水の苦行八年また高野に入て休糧を修ること三年眞積功成て法錫を薩藩に旋し直に護國山安養院に住持たらしめ給ふ法器大德迺に緇素を提撕せしかば道家の模範一山の光輝とぞ覺えけるまたかるに　三位侯數盛淳を徵て政事を垂

問し黑衣宰相の風あり遂に强て還俗せしめ即日國老職に拜（ハイ）めらる而して請に因て法號故のごとし淳素より世故に幹（カン）く治體に達す且戰陣に臨みカ戰數回飫肥の伊東氏と鬪ひ莊內の賊を討て身づから敵首を斬ること若干（ソコバク）級就中豐太閤と和平成て淳悼さして千臺川を涉る時に敵中に人ありて曰薩人負軍して降參に出るの見苦しさよと嘲り笑ふ淳大に怒り舟中の棹を橫へ舷に立て曰それ軍の勝敗は兵家の常なり今汝が輩人の騏尾（キビ）に附て虎威を假の賊なり今一度面を出して我に勝敗を試みよと呼りけるその勢ひ決然として犯すべからず敵中肅然となりて復一言を發するものなし此日　君侯泰平寺に入て豐太閤を見玉ふに淳亦從て太閤に相見すかくて慶長に至り大阪方と江戶表確執に及びて關西關東の諸侯双方に立分れしかば天下兩分の合戰有べしとて闔國の軍兵東西

長壽院勇を示す



に奔走(はせチガ)ひ各辨嚴(イクサヨウゴン)の外他事なし此時　宰相侯上方に座在して盛淳に早く罷登るべしと馬追(ウマヤ)をもて召れけり盛淳命を請て其妻に告て曰予此行や再び汝を見じ予陣沒すと聞ば大興寺阿彌陀像をもて予が傳神とせよと囑(ツケ)置ぬ又これを眞言僧に聞けり安養院の寺領始七百石盛淳の出陣に臨みて用金給せす遂に寺領の半を典と商家に金を借りて軍費に供ふ是より寺領減じて今に至いたるふる當時の采邑蒲生郷の兵七十餘人を引率し八月上旬先ッ山川の津まで乘出たるに惡風船を漂はして甲冑悉く濡りしかば爰に滯在し中國の洋中に到れば順風無きが上海上所々關を設けて往來を差塞げり盛淳は舟子共に晝夜六七度の餉(シヤク)糧を食せ柁(カヂ)も櫓(ロカヒ)も擢(クメヂ)よとぞ漕せける九月某日攝州兵庫の津に押渡りけり侯は先達て濃州へ出陣し給ふと承り兵庫由緒の商に寡君若し軍利なくして此地に來り給はん時はよきに計らひ得させよとて數多の金子を與へ未然を謀置けりこの商家は淳の同家にて小豆屋某とて後に侯を迎ひまねらせしも淳の功とぞ聞えし淳は片時も急ぐ道なれ共中途は敵兵路を塞て容易通り得ず途に小早川隆景に行逢たり盛淳に向ひ御邊は島津殿の御內とぞ見請たりいざ打列て參らんと詞を掛られ盛淳對て我また中國衆の槍先を存ぜねば覺束なく存ずるほどに同道は斷なりと引離てぞ打せける盛淳士卒に下知しけるは箇樣の時大勢にては敵中は通らぬ者なり今向に見えし一群の旗の手は一定敵と覺ゆるぞわれ單騎(タン)馳行ん若通るべくば麾を前さまにせば引返せと騎切せられしがやがて味方を麾き夫より所々堂舍民屋に放火し煙の紛れに赤坂の本陣へぞ馳着たり乃馬(カツ)より下りたりしに　侯此由を聞召大に喜び給ひみづから軍門の外に出迎ひ長壽今かくと手を執て陣中に入せ給ふけふかくと恃(タノ)

思召明日ははや合戰と云前夜しも淳が參着しかば　侯の悦び思召し給ふも理りとぞ知られたり石田三成も盛淳着陣すと聞付見舞つゝ明日の軍配は偏に貴老を賴み存ると金の團扇を贈りける今夜淳申上る旨あり　侯太閤より拜領なされし黑地に金を以て鳳凰の繡(ヒモノ)ぜし御陣羽織を下し給ふ此夜大阪方筑前中納言秀秋内應(ウラキリ)の風聞ありて諸將秀秋に使を遣し數參會あれと云送れど稱病して來らざりしとぞ夜討の開西の諸將軍議區々なるに石田が臣島左近其手勢一樣に鞘に白紙を左卷にし殊死を決して出立つゝ進出で申けるは關東勢遙々の長途を經て人馬共に瘦大て物の用に立べくしとは覺えず今野營を取候へば夜討を掛てまじく御所議未を一打取候半事相違有まじく夜討は討隊は已むこと在しく島津惟新入道如何有べくと凡そ衆議所決せざる事を得ずと衆を擊れば手段なり大勢の夜討をなし返すも新井氏が書しものに止ては往々おのれの見にはこりて動も者すれば人を欺く說べし多し

今日實に慶長五年九月十四日寒雨

關ヶ原合戰の前夜寒雨
指を墮す故草火とつくる

兵粮乏しく青稲を刈取り
煮こうく飢戎救ふ

連に降續きて篠を突がごとく冷氣指を墜し人々饑餓甚し僅に草火を焚て肌を暖め芋魁を烹て飢を凌ぐ明れば九月十五日辰の刻早々東西の軍初り天地悉く震眩すいまだ贏輸も決せざる時筑前中納言秀秋案の如く心を變じて内應し松尾山より眞下りに西軍の尾を取巻き切て懸りければ御方前後の敵を支へかね忽ち敗軍となりて右往左往に披靡て薩軍は二番隊にて黒田細川福島の三方の敵に懸合てぞ戰ひける東軍勝に乘るの勢ひ颯々として風雨の如く我備の眞中を七百騎計鑣を並べて兩度まで駈入たれば御方散々に崩立誠に危急の有さま昵近　侯の御側に差寄てこはいかゞ遊さるべきぞと申ける時盛淳いらつて卿等今の時に臨んで又何の言かある早々一方を蹴破て守護し去き給ふべし願は臣　候の諱を冐して茲に死せん　侯肯んじ給はず淳泣て云　侯何すれぞ

や今匹夫の死を輕じて社稷の重を顧み玉はざる滔々と諫め奉れば諸臣御馬の口を引向けつゝさらば〳〵と別を告て徐々とぞ去給ふ淳は御跡に踏留て寄來る敵を防ぎつゝ時刻を移すに或人申けるは夫感激し此時退去て身を殺すは易し事を好し謀を遂に從ひ奉る者は再び故郷へも濟すはかたし此時退去て身を殺すは易し事を好し謀を遂に從ひ奉る者は再び故郷へも人生々に歸りもしなん跡に踏留るは今を限りと思ひさだめておみし計りやらるべし且昨夜よりの寢折れやすず食にも飢て今朝よりの東軍にも懸の合せ戰に人馬共に勞れ果つ及の潮過去玉ふ時刻見合て軍すると稱すこと合を淳が戰功の第一軍すべき常人の能する處にあらず此淳の手勢共東軍の鐵炮に打しかれ覺えず卻走して小高き丘の後に逃入れり此時盛淳齒を切り大音聲に穢おびれし人々かな國を去る事數百里活んと欲して逃延べき道やはある兼々の詞にも似合ぬ卑怯ぞと馬を乘廻し下知する言の下に長崎隼人と名乘り鎗追取延て未練は仕らじと立あがれば一同皆々守返す時に盛淳衆に向て曰　侯今此を去玉ふこと幾程

ならん衆僉曰はや御馬驗も見え給はず遠く往玉ふと申す扨はめてたし時分はよきぞと金の團扇を打捨さまに太刀を拔かざし馬の鞍壺につゝ立あがり島津兵庫入道死狂ぞといひもあへず喚てかく時に侯より賜りし陣羽織鳳凰の金色旭日に映じて耀きける稻麻竹葦の如く取圍ふ關東勢眞の大將と見てければ我劣らず功名せんと前後左右より畑すゝき秋の尾花の風に亂るゝごとく鎗の穗鋒一度に突立〳〵竟に七本の鎗玉に貫かれて五十四歲を一期とし君の御身に代りて討死をぞ遂たりける○又新井氏が關ヶ原の事書せしをも見ればその時德川殿第四の御子下野守忠吉海道の大將軍としこの時忠吉二十一歲後に三位中將薩摩守と申ける位尾張中務太輔忠勝をぞ差向らる扨九月十五日の軍も直政が手より始りける島津方は細川黑田福島等の多勢に掛合て千人計

長壽院盛淳関ヶ原
まで御諱を冐し
東軍の鎗衾の中
を馳入戦死を

其二

盛淳戮死の処

のけかぶとに戰なつて落て行直政が士島津こを通れと云直政固より島津入道と見てけれども下野守殿の御供はしつ續く味方もなければあれは御方ぞと見ぬよかしにて在しを直政が兵もとは甲斐の武田が家に在し者成しが無骨者にて頻りに敵成よしを云しかば直政こらへず追かくる下野守殿も續きてかけ給ふ島津が兵取て返して戰ふ下野守殿組打して御手負る島津方松井三郎兵衛と云者と馬上の組打共云なり直政も柏木源藤が打鐵炮にあたり馬より眞逆さまに落島津も終にのがれてけるとありまた書せしものに其家老の長壽院盛淳と云もの主名を稱して討死しけるを眞と心得て首實檢に出したればあるにもあらぬ首なりけりと書せり

島津中務豐久の討死は亂軍の間にや紛れけん終に有樣知る人なかりしとぞ今美濃國松尾山の後柏木村（關ケ原より山路を計こえて四里）

の地なり今は旗本高見八郎知行所と云へり又ふあり墓表に大なる山茶樹（ツバキ）を植たり是豐久の墓也とぞ土人の說に當時三輪內介入道方齋と云ふ者豐久の死骸を拾ひ此地に葬り瑠璃光寺を建て菩提所とせしといへり方齋何の所由もて豐久の屍を收め其菩提所迄創建せしにや審なる事は未尋得ず俗說に豐久戰死の後足輕一人小者一人生殘りて流浪しける處紀州根來法師に豐久の肖貌に聊かたがはぬものの在けるを足輕小者とこの法師を誘ひ我主人は出家ぜられしとて豐久と僞はつて列かへりぬ豐久の妻信としけるを豐久の乳母にてあるもの僞法師が浴の垢流すとて打見れば本主は背に黑痣（ホクロ）の座在（マシマ）けるに無きはいぶかしと申出せしより僞者なることあらはれて法師と足輕小者二人をも皆密かに打殺してけり一說には豐久の守役せし宇田津某と云者僞者

井伊直政下野守殿軍
奉行まて励し〳〵追うくる
柏木源藤蔵の中より隠きて
直政を討ん

世俗ま是を
島津家車返の
備といふ

松井三郎兵衛下野守殿ま
組勝て既に討ん〳〵きるを殿の
郎等馳来て松井を討つ
いと危〳〵といふべし

なるを見顯して殺せし也豊久の後室はかゝるいはけなき羞辱に自害して果られしと云傳ふ甚怪しき說共なり抑豊久の乃父中務太輔家久はならびなき良將にて天正十二年有馬鎭貴より援兵を　三位侯に乞れける時家久豊久大將にて其勢三千人を引率し肥前の國有馬の地に押渡り龍造寺隆信が六萬餘騎の猛勢に掛合せ一戰の下に隆信を斬て遂に島原城を攻拔て鎭貴を水火の中に救れたり是智謀勇略古今に比類なき働とぞ申ける家久は日州佐土原の城主にて幕府の昵近なりしを羽柴美濃守秀長が爲に毒殺せられ後に息の豊久關ヶ原に討死と云を以て佐土原の地を擧乏られぬされば實に陣亡せずして歸國あらましかば擧族相謀て豊久の罪を幕府に訴へ本土に復さるべき講解をもなすべきに何とて僞法師を納て其妻も識らずと云事の出來けるや旁俗說のごとき別に

故ある一義にぞ○又入來院又六重時は當初庄內陣に　德川殿御加勢の人々をも下されし謝恩使となりて近江路まで行かゝりしに大阪に軍起りぬと聞つけて主從二十七人にて侯の御本陣に馳參じ奉陪せられける最初より出陣の戒なければ郎從は空肌なりしとぞ扨九月十五日の合戰に討死ともいひ或は同き二十二三日頃追兵共に尾襲られてとある百姓の馬舍の上稻稈の中に隱られしが郎從の者共は其屋口の石橋の下に潛居しを追兵に見付られて强く拷問にかゝり終に主人重時の在所をしらせたるこそ無慚なれ一說に重時百姓家の網代天井に登り隱れたるに網代の罅より鐵炮の朱臺見えける故敵兵下より鎗もて刺たりともいへり是此兩人さしもの主從の世臣にて共に花々しき軍をもしつ或は　侯の供奉にも侍るべきに時の不幸にて二人ながら健鬪敢死の擧動

をも聞えず亡匿亂軍の中に命を隕されけむはいとゞ口惜し
き事共哉士は死すべき場にて死ざれば不圖恥辱を蒙るとか
や昔楠正成の湊川の戰死は時運を顧ざる早打死とをしみ大
石良雄が仇討などは直に腹掻切てよかるべしと評せし正成
は其復興の功再期すべからざるを知こと明かに良雄豈命を
萬が一に僥倖せしにはあらざれ共其死所を得しは正成に及
ざること遠しとぞ申ける○或書に此時島津方は其家に傳へ
し車返と云備を立て人數を旋回〳〵引退てつなぎの鐵炮を
並べ打て井伊兵部が腕を射たりと見えたり車返と云は上杉
謙信の陣法にて世には車返と云なせるものなり關ヶ原の時
此陣法を布れしと云も世にいひなせしにや此時川上左京亮
同四郎兵衛同久右衛門久保七兵衛押川强兵衛五人小返の鎗
をつかひし由は見えぬ謙信の車返手矛と云ば兵家者流の秘

せし處とか申に或書に車返などいふ法は誰も下知すれば能
せらるゝ所なるが其軍法の要訣と云は君臣相和し同勢一致
する事島津入道の兵を使しが如く一體同心にあらざれば行
れがたしと言けるものなり此に由て之をみるに堅甲利兵の
師富貴豐大の尊も之を千里の外戰陣の間に用れば一も賴む
に足ざるなり　侯既に關ヶ原を御退ありて山道にかゝり玉
ふに微玉ふ行なれば昨日より朝魚夕菜の食さへつや〳〵に
は參らせず餘りに痛はしく見奉て中馬大藏白尾理右衛門と
云者共ひそかに村里に走行き米飯白餅をとり來て　侯に進
めたり然るに手自らこれを幾つにも切給ひて一片も聞し食
さず左右人必皆々召上られ候へと申上けるに　仰候は手前
には乾飯をも鎧の裏に蓄へぬればさな氣遣そ汝等こそさぞ
草臥けめ汝等が打倒れなば即己が難儀なり一口づゝなりと

も給よかしとて其飯餅を盡下されける扈從の人々こは勿體なく候とて聲あげぬ計りに涙催してひとしほの感激彌增て勇氣を發して鐵壁も擘く樣に見えしとぞ

三略有言、昔者良將之用兵、有饋簞醪者、使投諸河、與士卒同流、而飲、夫一簞之醪、不能味一河之水、而三軍之士、爲致死者、以滋味之及已也、此意を　日新齋忠良主の詠じ玉へる「酒も水ながれも酒となるぞかしたゞ情あれ君が言の葉況や　侯生れながらにして此德行を保ちて至誠の情に出給ふはいと難有事ども

かし○又或人の申けるは當時　侯孤旅を振め衆と引離れて退玉ふに尋常ならば敵急に追掛奉らん事必定にて危しと申も愚なるべしされどもかゝる大敗軍の中にも陣を肅へ亂さず徐々として一團の殺氣天を衝くの形勢なればさすが勝誇りたる關東勢も豫て　侯の英名は聞知りぬ堂々の陣正々の

旗左右なく掛らんことも得ずとありける又　德川殿の本陣の前を通り給ふ時川上四郎兵衞忠兄して島津某無據譯にて此度大阪に屬して候只今本國へ開き候ひき委細は本國より謝し候半と言せ給へり敗軍して敵陣の前を打通るにかく使して斷りし由は和漢にも例なくぞ聞えし是其勇威を張りてしかし給ふにはあらず一旦盟主とし事へし大阪方に御方し給ふは武門の義理にしてまた敵陣の前を徐々と打通るをば見つゝ通しなむは敵に取ての怯惓（キヨウ）なるべしと此方よりして子細いはせられしは此亦禮儀なり德川殿も之を感玉ひて强て咬留ぬ共せざりしならんといへり又竊に之を聞けり　侯昔は九州の地を定め玉ひてより一度覇業を天下に建玉はむとの內旨ありこたび大阪に與し給ふにも西軍若勝軍したらむには夙志を遂げ玉はんとにや密かに島津某に留主官の顧

命もまし〳〵けると申傳ふ蓋し事の成否は天なり時なるべし

川上久雅贈二辭世一歌於二故郷一

闘ヶ原の役濟々たる多士雄偉の行跡其人を少しとせず然れども文雅を兼て哀に聞得しは川上彌四郎久雅なり久雅は因幡守忠村十五世の裔筑前守忠實が子にて天正四年誕生し幼名を千鶴丸と稱し惟新公に仕へ參らせ慶長五年闘ヶ原へ主從五人にて御供仕たりけるが一人の家來を近づけ明日の御合戰は君にも御心を遣せられ雌雄を一時に決すべしとの御意を承りぬ危に臨み命を委ぬるは臣子の分なり吾幼少より召使はれし御恩報い奉らむ事此時と覺ゆるぞ去れど吾妻なく子なし古郷の親人の歎き給ふらん程嘸やとおもふなれば汝は故郷へ歸り弟の治部右衞門を吾と思召殁後をも嗣

濃州まで川上弥四郎討死を決め歌を詠て我郷の弟に別を告て郎從等も各髮を剪り書を認め故郷へ形見を贈る

せ給はれと申すべしとて一首の歌を治部右衛門久通へぞ送りける

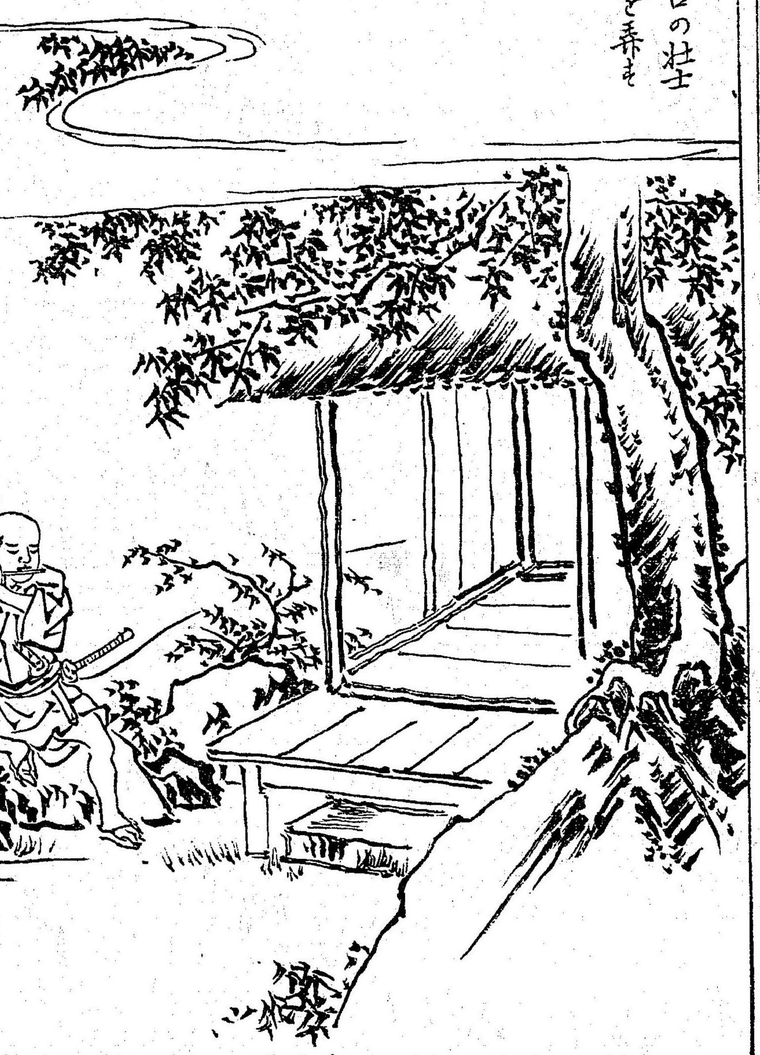
東路の草葉のうへにおく露の
消ゐて歸らぬ我身なりけり

翌れば九月十五日必死を決して供奉しければ　公御急難の場に臨み一足も去らず群り來る敵を突留て防戰し享年二十五歳を一期とし討死をぞ遂たりける百草原頭白骨を瘞(ウヅ)て名を埋めず三十一字の情青史を照し壯士一度去て復不歸易水風寒の感を興さしむ

大口の壯士到二山神の幽居一

夫大口の鄉は四方連山波濤のごとく森々たる山中に人々甍をならべ住居せり況や　吾藩の雄鎭他方の境目なれば其昔天正のそのかみ一日だも鬪戰のやむ時なき時分　邦君豫て諸臣の中より文武の人才を撰びて町田存松新納拙齋此兩老地頭を仰付られし故鄉の堅めとして在城せしかば其下に立人々心も猛く義に勇みし壯士共也其時分いつの頃なりしにや一ッの奇事こそ候ひけれ頃しも中秋の望月の折からにて處の人々昔よりの習ひ今宵は明月の佳節なればとて某の處に集り酒酌はやして月を弄びなんとて集りしに獨の壯士聊用事のありて時刻後れしが道すがら最中の月に乘じてあちらこちらと徘徊し今夜月明人盡望不知秋思在誰家と口ずさみて傍なる辻堂にいたり前なる巖頭に腰打掛て嘯ぬたりしに夜の更るに從ひて草葉の露も玉をみがき四方の氣色も蕭條として吹來る風やゝ肌骨に砭し物淋しき折から豫て弄びし笛取て一曲を吹鳴せしが餘音嫋々として山谷に響き幽興更にたとふるにものなく吹すさむ處に不覺身の毛もよだちて

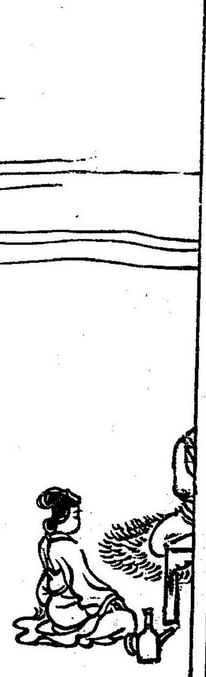
中秋の望大口の壮士
月下に吹笛を乗む



美人笛声を感じ天上り
落て壮士を誘む

心地よからず成ければ笛吹止て後の方を顧れば世に類ひなき年の頃二八計の美人秀色如瓊花霧鬢風鬟形容悽々たるの狀誠に不凡とこそみえたりけれ壯士是を見て且驚き且疑ひ茫然として思へらく月宮の嫦娥高唐の神女のこゝに來格するやといぶかしく又一度は狐狸の來りて我をたぶらかす歟と腰の刀に手を掛て睨み居處に美人媚笑て靜に歩み寄て云樣妾はもと山家の賤の女今宵は中秋の佳節といひ殊に勝れて一天隈なく月の光も清亮なれば賤が心の憂をもはらさんとて歩みを運びし折節情郎が吹笛の音いと面白くて先より蹤躅聞居しに妾が起憂動情誠以て音曲の鬼神を感じ人情を和ぐる事和漢ためし多き事にて侍るぞかし今宵情郎の興を妨ぐるとて云へども願くは賤が庵に貴足を勞し給へかしと頻りに請しかば壯士つく〳〵思案して田舍にて見もせぬ美し

き女房のかゝる情狀は不思議の事とは胸中に觀察してたとひ山魅狐狸の術にもせよ何かは恐れ退くべき大丈夫その始末を見屆ぬも殘念よと力あしを出して諸共にいそぎしが程もなく大路に出て一ッの洞門に至る彼美人先立て內に到りいふ樣は今宵はからずも珍しき情郎の月下に吹玉ふ笛の妙音に感じて此處迄つれまねらせて候人々席設けはといへば女の聲して立騷ぐ音聞えつやがて美人壯士を引て高樓に登り一間の座敷に就たるに其狀金銀珠玉を鏤ばめて是や廣寒宮とも云つべき光景にて床頭の香爐に香氣馥郁として薰ぜるは桂子月中より落るかと疑はるゝかゝる處に數十輩の侍女どもも青娥紅粉盡〻態含嬌〻て玉盤に見なれざる珍菓時ならざる佳味を盛て座上に備へぬ誠に善盡美盡せり其時美人玉の杯を擧て壯士にすゝめていふ樣妾今宵はからずも如何なる神の

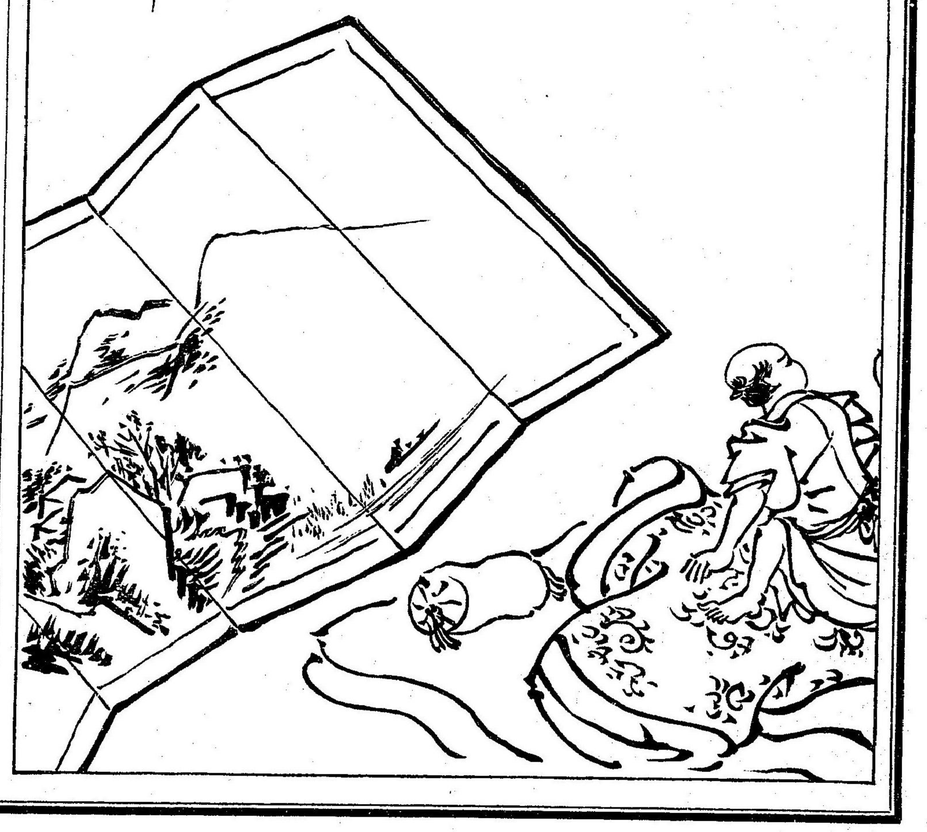


壯士美人の洞房まで至る美人富を張て壯士を欺給ま

縁にして情郎に會することを得たるや實に千載の一遇なり」とて交酒を酌つゝいへらく「情郎の玉指を勞するといへども願くはまた一曲を吹てきかせ給へ」と請ふ程に壯士も不得辭日頃おのが嗜みし手術を盡して吹ならしければ滿座鳴をひそめて聞をりともに手を打て一唱三歎しつゝ人々感に堪入りぬ美人壯士の吹笛を賞して云樣誠に以妙手の調曲覺えず妾が心に花を開かせて坐々路に春情を發侍りぬ」と云て益酒をすゝめて人々をもてなしたれば滿座の侍女どもも笑壺に入て歌つ舞つ艶なる巧詞を演て酒を強られ觥籌幾無算壯士も深く醉草臥て是や音に聞く唐の劉郎が天台山の仙境にいたりしもかくやと思ひやられて逸興無涯しきりに眠に就たりける時に美人いふ樣夜もいたく更ぬれば休み給へ」とて壯士は侍女どもに扶けられて洞房に至りて臥床せり幾もなく郡

郡一時の夢醒て頻に小溲の心地催しければ洞房をつと立出庭に至り小溲相仕舞て能々光景を窺ひ見れば十五夜の月影はや山の端にかくれなんとして立掩ふ松柏の風の聲冷ましく聞馴れざりし谷川の巖に走る水音と梢を傳ふ呼子鳥の聲幽に雲間に聞えぬれば扨は吾過ちて人の往來もなき深山の奥に魅され入りし者ぞかしいや〳〵よしなき處に來りて若怪事を招出さんより寧早く逃出んとは思ひしが待てゑばしかゝる珍敷神仙の隱家にみちびかれていらざる兵亂の浮世に出んも口惜などと案じながら壯士の矢長心におもひ返して君の祿を食ひ父母の遺體を請し身の物外に生を空ふすべからず末長く君父に事ふるこそは臣子の道ぞかしと内に拔置し大小を取て立去らむとて座敷に至り見るに盃盤狼藉して燈火の影稍幽かなり其時壯士思惟すらく珍敷處に至

壮士酔て寝ゐ乾き覺て
後美人を疑ひ是を殺さん
とき誤て其衾衣を刺す美人
ハ飛去り天地忽ち黒暗と変ー
山中震動す



壮士洞房の怪異る駭き深山幽谷を攀ゆり命を限りる逃脱る

りし事なれば何歟證據を取りて歸らんとあちらこちらと見
廻せば床の上に數卷の書籍を積置けり是こそ屈竟の證據御
座んなれと窃に懐に隱して立去んとせしかども又彼美人が
目寤て若も追來らん事を恐れて茫然として立たるが不圖心
に一計を起したとひ神仙にもせよ山魅にもせよ彼を殺さん
こと何條別の子細かあらんと巧みしこそ惜い哉壯士塵界の
因緣いまだ盡ざる所其儘無二無三に洞房に走入り彼美人が
寢たりし上に立跨り高田が鍛ひし三尺の龍釰氷の如くなる
をすつばと拔き高胸元を腦も碎けよと刺たるが餘りにせき
込し故か又は彼美人神仙の方術にて刀劒の刄を免れけんあ
くまで着たる衾を突通して美人の身にはこゞまらず座敷に
ぐさと突立し音に美人目覺てあつと一聲さけびし聲こはい
かに百千の雷の耳元に落かゝるが如く天地須臾に震眩し在

りし美人は何地にか飛去りしとも知らざれば壯士仕損じたりと大に驚き南無弓箭八幡助け玉へと逸足出して逃出したるに天地俄に黑暗となり美人が叫びし聲山谷に響きて只足下に在るが如く岩の角樹の根ともいはずひた仆に顚び落ち命を限りとぞ逃たれど暗さは闇し深山の奥の事なれば心體生ける心地なくて漸く夜も明方に及びてぞ叫びし聲も遠かりける程に息つき流し旭陽の出るを待付て東西南北の方角をとりて峯を越谷を渉り道の四五里も行し處に遙に虞人の犬よぶ聲聞ゆそれを力に行程に犬呼聲にはあらでおのが名を呼ぶ音なれば扨は朋輩親類共の吾をたづね來しものぞかしとおのれも聲あげて互に出逢つゝ扨しばし仰天して言葉も更に出合ず手に手をとりて始終の事を物語れば人々先は恙がなきを喜びつゝ、連れ歸ける其日數を數ふれば八月十五夜よりはや一七日をぞ過しける人々奇異の思ひをなしけるが壯士は洞房酒筵の興に草臥果て臥けるは僅一睡の間なるをかく晝夜を隔てぬるこそ信に古人のから歌に仙家日月本長閑と詠ぜしも理とぞ思ひ知られたり扨彼山神の幽居に至りし始末を地頭に言上し證據に取來し書籍も差出しけるが誠に人間世界の物とは見えずたとへば蟬の羽の如き物を書籍の樣にこしらへて中に蕃篆の如くなる物を書散して在りけり當時の人その事義を解しがたくこれを地頭屋敷の庫中にひめ置とて納たりしを間もなく其庫に火起りて終に燒失たり嗚呼惜哉鄕に博洽の君ヱ張華の人物なく是や浦島太郎が常世の鄕の寶物不老不死の秘策にてありしならんを神仙慳之人間に傳へざるにや返す〳〵も遺憾の事とぞ今にかたり傳へたる

倭文麻環卷之一　終

倭文麻環卷之二

目次

紀藩南龍侯踞レ龍蛇一
町田存松謁二太閤秀吉一幷察レ梅北矯命一　5
搏虎實錄幷泗川大捷說
高麗巫嫗
山田有信辭レ羽柴秀長賜二天草邑一幷島津忠隣歿レ根白坂之陣一
濱田榮臨殉死遺二誡レ子孫一

倭文麻環巻之二

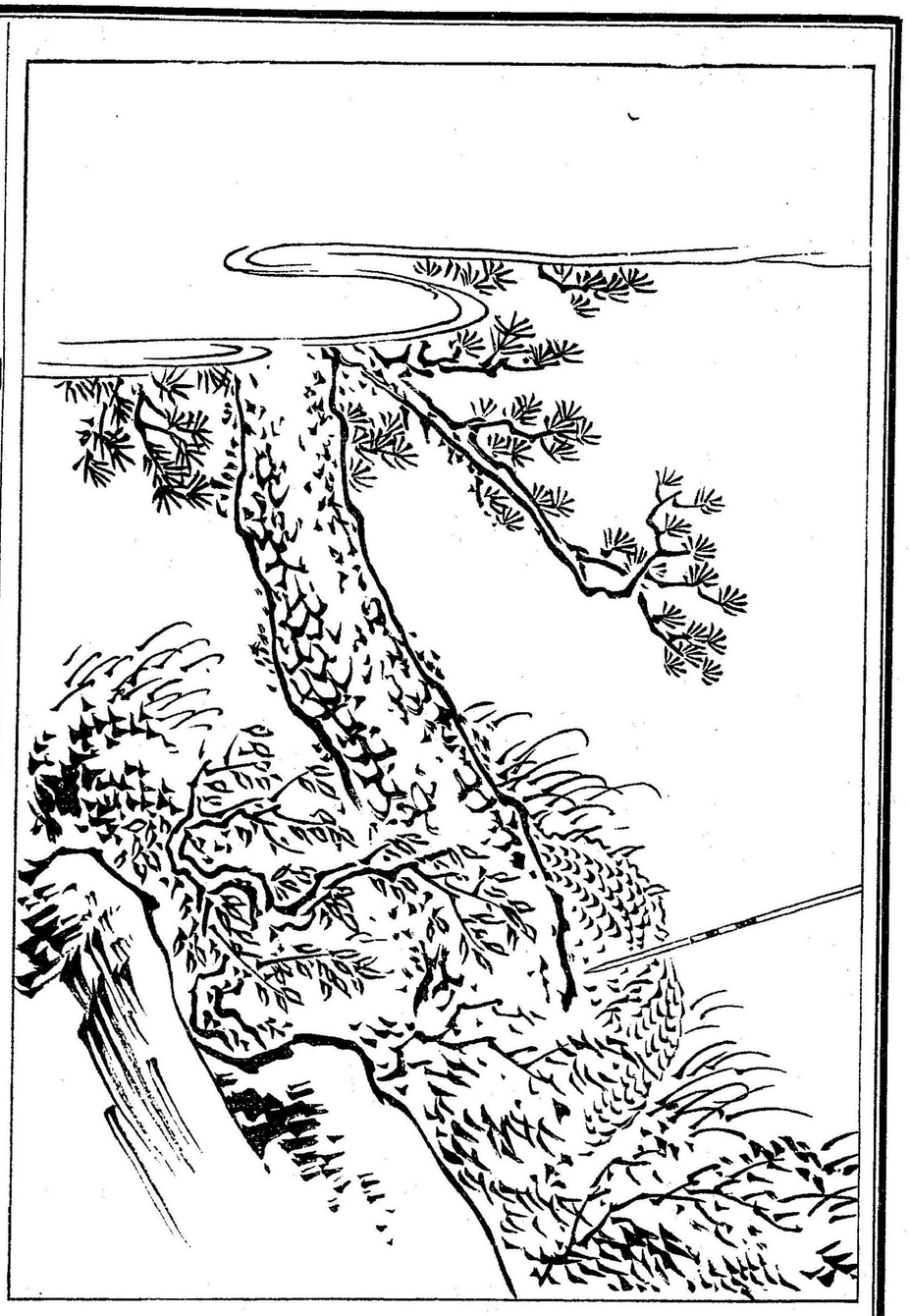
紀藩南龍侯踞二龍蛇一

南海紀伊州は平安の帝畿を二距事遠からず奔潮浪華の三津より南に突出し誠に中外の開門山海の咽喉なるものにして明光浦には千載の田鶴芦邊を差て鳴渡り玉津島姫も猶跡垂れぬと詠ぜられし名所なれば魚鹽の利賑へるのみならず麻もよひ木の國と平城の古言にも歌はれ嘉木良材を産し穀帛美菓にさへ滿足らはずと云事なしされば今の國初公大納言賴宣卿は　東照宮の十一男にて後に南龍公と諡す天資賢豪勇略におはせしを以てこの紀の國に封じ玉ひ剰神風の伊勢の半をも附庸としまぬらせられし程に今に太神宮の御修理を主らしめ神馬神領を世々に獻らせ給ひけるされば其定額五拾餘萬石と申ながら實は百有餘萬石の上國と聞えたり況や

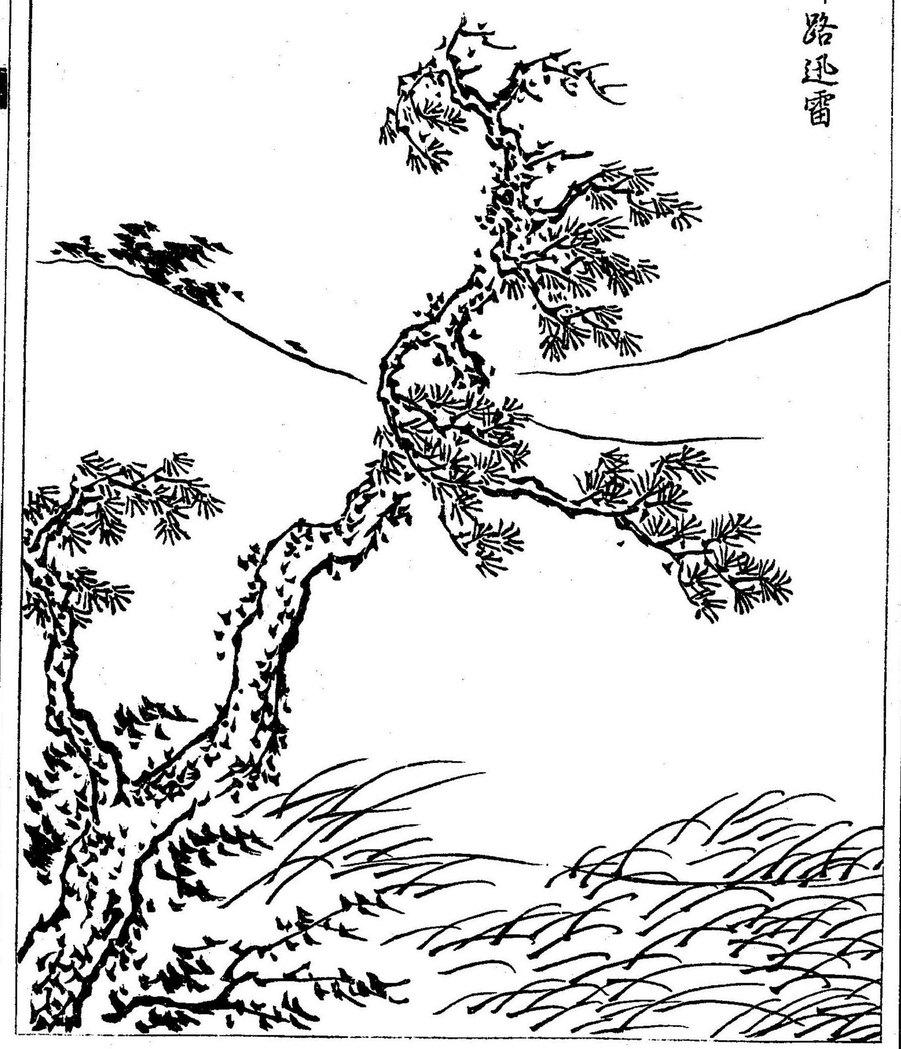
其邦域の内には熊野三山高野金剛峯寺の大社巨刹を納て褊しとせず重嶂層巒峨々と聳え峙ちて幾千萬峯と云事をしらず靈窟幽邃神迹其間に存在し麋鹿狼熊の外佛法僧の異禽にいたり此地の産物幾許と云事測るべからず然るに賴宣卿西南十三ヶ國兵馬の權を執らせられ戰場の利第一の功金鎗に若ものなしと天下の金鎗教師十三流を紀州に招致し該博の鋒を淬き贏輸の勢を試み其中より選用拔萃して天下その精妙に當る者なし自ら其器を揮つて郊野に田獵し軍陣の操練を講じ給ひ一日人跡罕なるの深山に馳騁し猪鹿を逐せられ惣勢は遙に後れて獨り近習のみ扈從しまゐらせければ姑く後陣を見合せんとて山蹊に横り臥せる一巨松の苔生たるに腰打懸て憩せ給ふに只見に即今松樹と覺えしものゝ蠢々と動たち委蛇と伸び行んとぞしたりける近習の面々魄を落し

あつと計色を失ひけるを賴宣卿手に執持玉ふ鎗の鋒を其物に指當て山神見ぐるしくきたなおびれぞ今に動出さば只一突に命を取られなんぞと睨へて踞せしまゝ少しも騷給ざりしかば其物も卿の膽勇にや辟易しけん二度は動きもやらず靜まりけり御供の人々こは怪事に候とて急勸めたてゝ发を去りて纔に一二町も過ぬと覺えしに俄に黑雲四方に起りて一陣の冰雨盆を覆すが如く霹靂震動し火燄の如き光り物前後左右に飛來り冷じなど云も疎なり然ども賴宣卿神色自若として其光り物をば蹴散し踏禿し躍り越てぞ山を出離れ給ひける蓋大澤の龍蛇潛屈する所其危事暴虎馮河の嶮しきに過ぎたりこいへども賴宣卿の嚴威金石も徹れるの勢に畏縮して龍蛇も其國土の主をば犯すこと不能にや甚奇しき事なりとぞ申傳ふる又この卿文學は熊澤了介に聞せられ其造詣

紀州賴宣卿



賴宣卿歸路逃雷
疾風生



輒も階に及ばれしなど云事了介の行狀傳に記したりまた卿の歌とて

もの一つ叶へは二つ三つ四つ
五はてしなき六かしの世や

按明謝肇淛言、人若不知止足之心、則必滿其願、而後止則將相不足、必爲帝王、帝王不足、必神仙、神仙不足、必玉皇大帝、又要超元會大劫之外、方爲稱心也、少不如意、憂戚生矣、夫人間死生之間、雖有千歲、事無了期也、故人能於進退死生、處之泰然、保其止足之心、必不墮落矣、

卿蓋其人なるべしこの卿の賢胤大納言光貞卿の御三男は貞享元年十月二十一日に紀藩にて誕生ましく未だ源六君と申せし時五百石の俸給を給りて京師都會の地に伴(イツ)て浪士の爲(ヲ)して遊學に出られつ仍て四方の風俗を聞き天下の事故を

察せられ享保元年五月　有章廟の大統を承紹給ひて後に有德院殿こそ申奉りける其少壯の御時に民間に棲止して能下情に通じ給ひしかば天下の主となり給ひ乃(サガ)て前朝の弊政を改められ當代の懿則を立て一橋清水田安の三卿をも創めて給ひ萬世不動の業を垂れ六拾餘州を泰山の安に措て亂民賊子肅然として螢燈の朝陽に消るが如く尺土も其有に非ざることなきの大平にいたるものは是有德廟中興の致す所にして抑亦南龍公遺訓の德化とぞ申あへりける

町田存松謁(ス)太閤秀吉幷察(ス)梅北矯命

町田存松は出羽守久倍と稱す本家十七代の家嫡たり父長門守忠榮は天文中實久の反せる時　大中公を翼(タスケ)戴奉りて功勞あり祖父伊賀守梅久は天文五年十二月七日の曉鹿兒島犬迫村にて戰死を遂られしかば　大中公其忠貞を感じ思召て舊

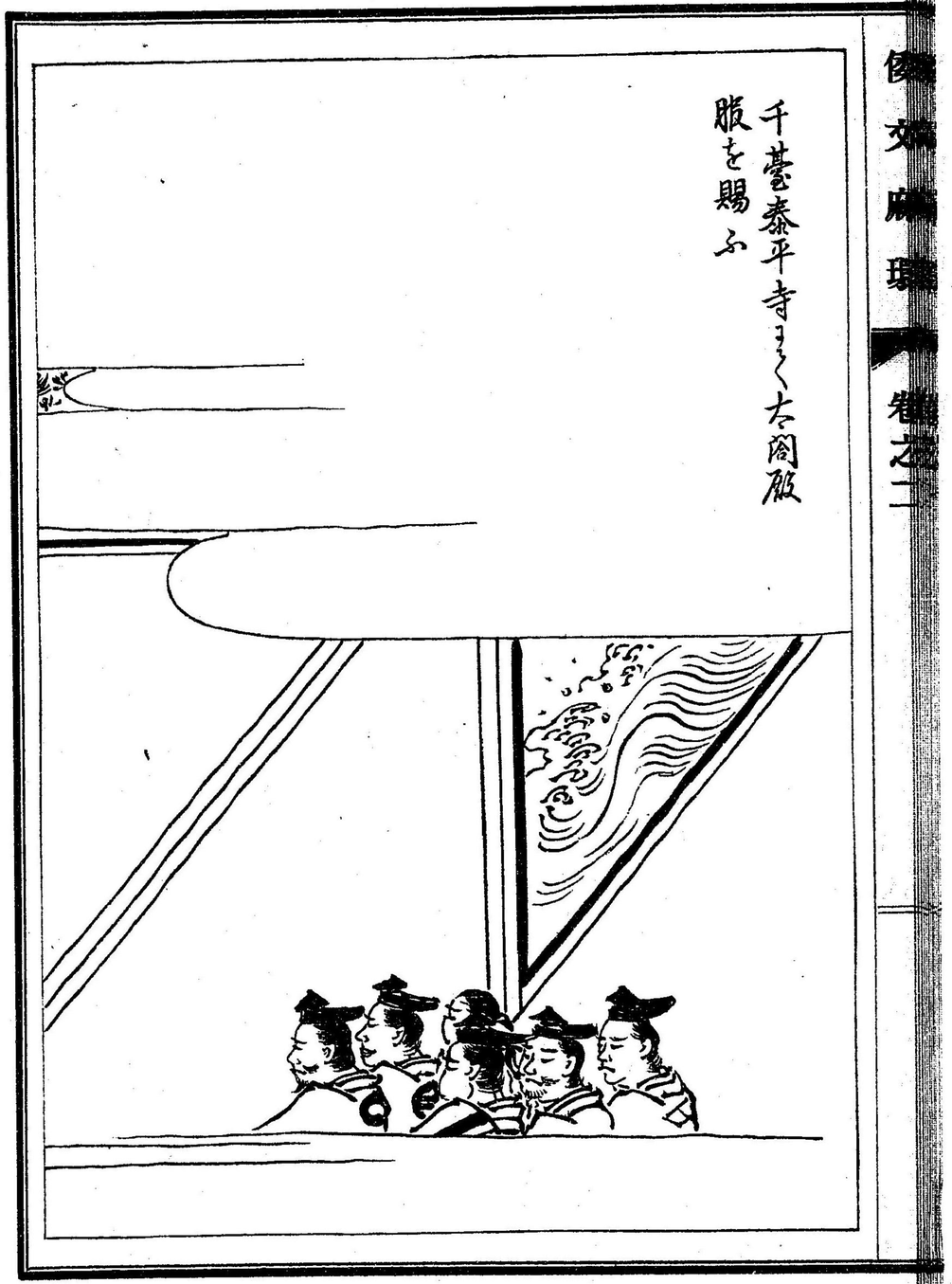
領石谷邑の外に神殿村若干丁の地を加封し給ひ久倍は　龍伯公の御時に御家老職に拜(ハイ)れてけり久倍素より智勇兼備りたれば始大口城の警衛として境目の重任を命ぜられ天正五年より同十二年にいたり豊後大友を伐給ふの時一方の大將を承り關白秀吉九州に攻入られける時は新納武藏守忠元等と肥後路より求摩山に掛りて御方の兵を引纏め賊の巢穴を踏渉(フミワタ)りて難なく我領地伊集院にぞ歸陣せられける今年天正十五年夏四月廿五日關白秀吉千臺川を泝り泰平寺に陣營を居(スエ)られ吾　公と和議既に成て五月六日　公伊集院へ入せられしかば久倍はおのれの領邑石谷より數多の雜費を供給し奉り朝の餉より始終の支度も世話し參せ　公頓て雪窓院にて御髮おろし給ひ　龍伯公と御改名遊され五月八日直に泰平寺に赴き給はんと裝ひ玉ふ然るに東國數萬の敵中に詣り給ひなんこと國家の一大事此時に極りぬと上下萬民安き心もなく婦人老弱は資財雜具を山林に持運び適き君恩に誇り國祿に飽し輩さへ目を側め手を袖にするの形勢にて譜代舊勳の重臣はおのが采邑私領に引籠り其攻口を固めて在合すさしもの昨日までは九州六ヶ國を臣服せしめ靡かぬ草木もなかりしかども　公の御轎(カゴ)を舁奉るべき駕輿丁さへ逃匿れてなかりければ久倍且怒り且泣て申されけるは朝にゆふべを測らざるは人心の危き習ひながらかゝる時しも義を失ひ生を貪るこそ無情(ツレナ)者共かなと自身馳廻りつゝ伊集院衆中の中馬仁右衞門其外士師松本抔いへる者を擊(ヒキ)出し來りて御轎をぞ舁まねらせける此時君の御供に候ひけるは出羽守久倍本田下野守親正長壽院盛淳平田美濃守光宗野村民部少輔良綱久倍の子町田左京亮忠綱二男勝兵衞盛吉等

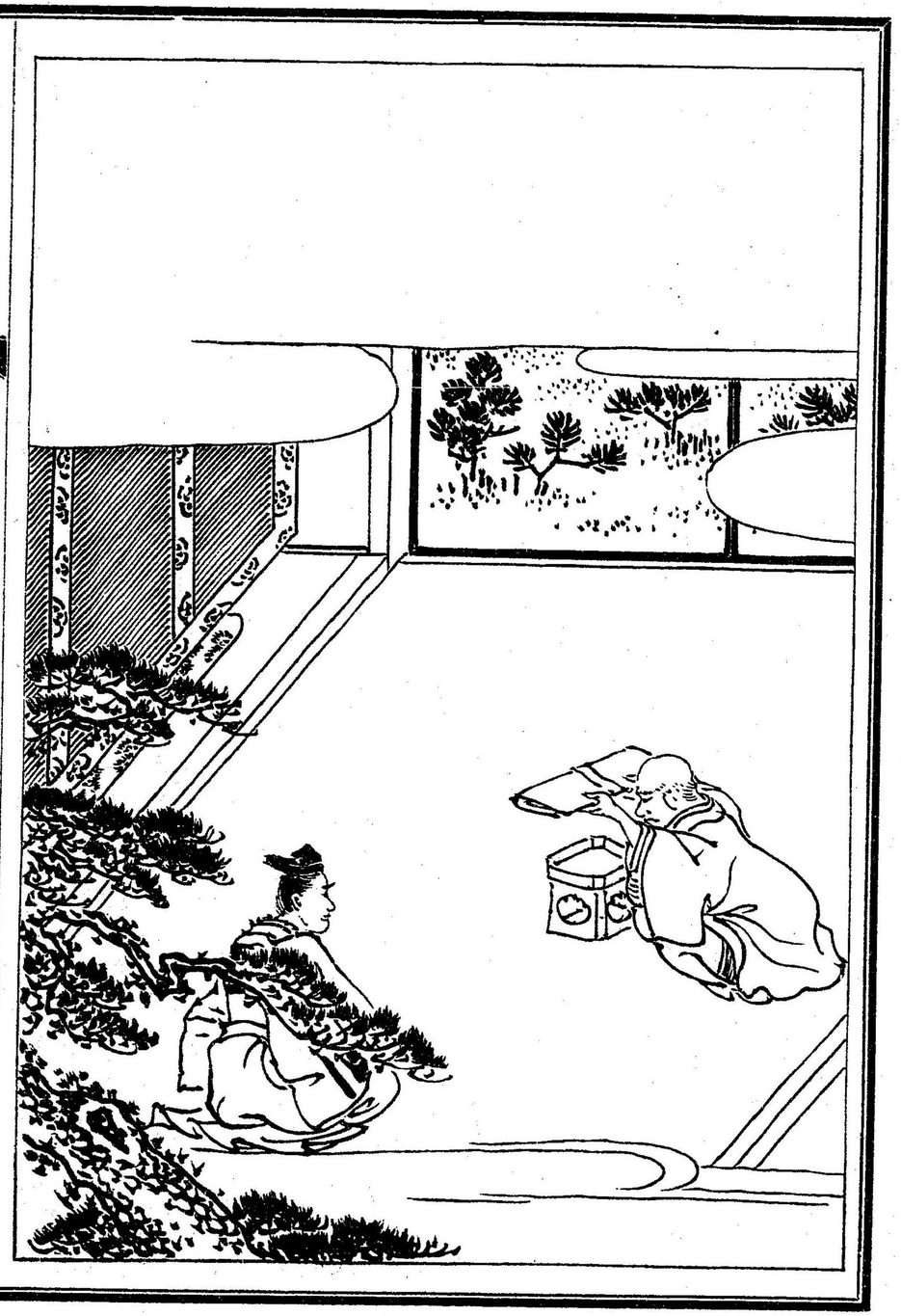
憩村ニて石谷梅久
戦死ス

童一人見秀吉太平寺にあるは童はこの盛吉の事なりとぞは七人のみ

龍伯公を保護して參られけるに御太刀は勝兵衛盛吉へぞ御持せなされける扨泰平寺にて秀吉に見參し給ひければ秀吉も薩摩陣和睦なくば軍難儀なるべしと甚氣遣されしにかく無事に和睦調ひしかば安堵悦喜の餘り自ら佩れし大小を解て公に賜り且久倍へは親らの羽織道服各一領を即座に脫て拜領されける其上久倍には御一族の親臣なることを聞召て二男勝兵衛を質に出すべき由命ありて泰平寺に留られ　公には御暇賜り鹿兒島郡吉田城へ歸り入らせ給ふ斯て文祿元年秀吉殿下一天四海を掌握し猶も飽ず思はれけるは昔神功皇后三韓を征伐し年々八十餘艘の貢船を日の本に朝獻せしを皇國の武威漸く衰へ弘安四年蒙古十萬の兵を遣し朝鮮王を案内とし我皇國を襲ひ參らせしを幸に宗廟社稷の靈に賴りて賊船二十萬艘博多の海に覆沒すと雖も我朝の兵今に至り異國に攻入て當時の怨を報ゆるものなきは永き日本の瑕瑾のみならず今我六拾餘州を平治すと雖も朝鮮王自ら來りて其賀儀をだに述べざる條吾朝に對し不敬の至りなり抑皇朝の事は天照す日の神の皇統千五百秋の行末限りなく治めまろしめす御國なればいとも恐こしいて〳〵我れ朝鮮王の罪を鳴らし直に明國を攻討て四百餘州を瞬息の間に踏禿し大日本の武威を海外に震張し胡元入寇の怨を目前に報ゆべしとて忽朝鮮征伐をぞ催されけるかゝりければ　龍伯公　義弘公　忠恒公を初として一萬餘騎の精兵を引率し朝鮮國へぞ押渡らせ給ひけるされど　龍伯公は　東照宮の御取持にて肥前名護屋に在陣ましく〳〵けるにことし六月中旬梅北宮内左衛門國兼といへる者謀叛を企て　龍伯公の命を矯り

千葉泰平寺にて大閤殿
服を賜ふ





肥後佐敷城を攻落し村落を亂妨し且鹿兒島へ三たび迄使を遣して申送りけるは　龍伯公既に諸將と計を定め再び豐筑肥の六ヶ國を打從へ給はんとて臣梅北にも兵勢を催し既に肥後國へ打入れり秀吉には是を聞て名兒屋より唐津へ押渡らんとせられしを古城の渡にて難なく秀吉を討取たり只今破竹の勢に乘じ三國の人數を傾け夜を日に續て早く肥後國に攻入らるべき由被仰所なりとぞ告たりける此時鹿兒島に は久倍幷に新納忠元鎌田出雲新納越後本田六右衞門等御留守役となり御政事の大小となく此人々ぞ掌り申されけるに此使三たびまで敷浪を打て急を告來りければ忠元以下の諸老臣大に驚き騷ぎて既に出陣の用意櫛の齒を挽が如し時に久倍首を振て肯ぜずして曰熟思ひ廻らすに吾　公是程の一大事を擧給はんには必ず墨付の御親書を以て先臣等にこそ

告知らせ給ふべけれ況や　義弘公を始奉り軍を絕域に暴し父子兄弟離散して安きこゝろもあらざるに何とて梅北がごとき匹夫にかゝる大事をば計らせ給ふべきや是梅北が奸計なるも知るべからず卿等必ず騷ぎ給ふなと曾て同意せざりければ諸老臣も稍靜りながら隼り男の若者は久倍が案じ過し卑怯者と私語けるに果して五日の後梅北が謀叛結搆の由申參りければ諸人久倍が先見の識ある事を稱しあひ皆跡ぜきをぞいたしける此時若誤て梅北が奸計を信じ干戈を邦內に動し肥後國に攻入たらんには秀吉の震怒益以て天を衝き其殃將に不測に迷ひなんは必然なるに久倍神妙の遠慮により一言以て國家を安んぜしは社稷の臣といふべきなり又文祿四年乙未の歲太閤秀吉より御領國の寺院及其餘の田地を毀破せしめ其上一統の田地を丈量して五十七萬八千七百餘

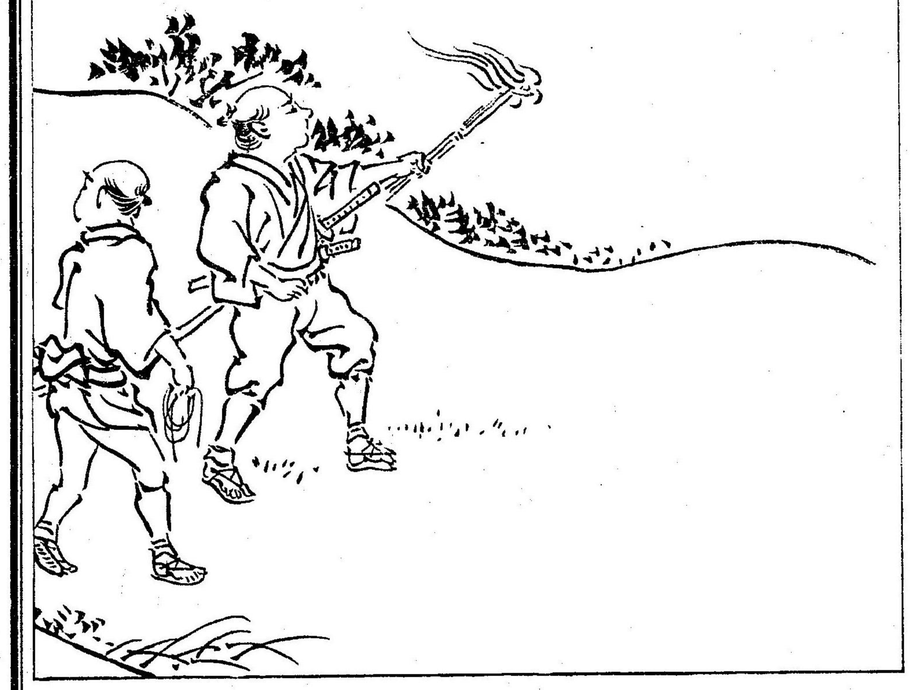
征韓御留守ヲ梅北國兼
公命ヲ矯リ飛脚ヲ發兒
島ヘ遣ヲ町田存松親ヲ
其事情ヲ糺問ス

天下一國

石の外大隅加治木溝邊等の十ヶ村一萬石は秀吉の食地とし清水敷根國分等の五ヶ村六千三百石餘は石田三成が領邑とし肝付高隈等の三ヶ村三千五石は細川幽齋が領邑とし庄内八萬三石は伊集院右衞門太夫幸侃に知行すべきよし幽齋太閤の命を受て配當し三ヶ國の田地は偏に幽齋一己の手に出る程なれば譜代新參ともいはず思ひ〳〵に幽齋の旅館に奔走し我後れじと苞苴を持捧げて己れ〳〵が領地知行を濫望し世の嘲り人の譏りをも顧みず淺ましかりける世の勢なり然るに出羽守久倍一人公用の外は未だ曾て幽齋の門に周旋せず　御當家の事は鎌倉右大將家より三ヶ國を封ぜられ數百歳連續せる處なるを此度梅北が謀叛一揆不慮に到來しそのゆゑを以て田地の支配を命ぜらるゝ事是非なき仕合ながら主人　龍伯を始め在陣留守の事にて毛頭存寄せざる處に

て候得者國家靜謐諸民安堵の御仁政を施されかしと幾度も申込て一度も自己知行所等の内訴とては申出られざりし程に幽齋支配中久倍は無知行同前なり扨翌々年正月に幽齋田地支給の事終りて名兒屋のごとく發足せむと市來迄出立ありし時久倍は幽齋見送としての御前を懇に賴み入られ直に鹿兒島に歸宅し又曾て私事に言及さず此時幽齋久倍を感心して市來鄕吏共へ申されしはおのれ鹿兒島に在りし日大小身によらず我がちに知行の事を望まれ一己の榮耀を得られし輩は今日にいたりては我東歸を一人回顧せるなし然るに久倍其身の訴とては露申出されず主人島津殿御爲計一向心に懸けられしかばおのれも大形にて久倍へは知行迚も班ざりしさるをけふ遙々是迄も立出て見送られ猶も名兒屋表の事共丁寧に託せられしは返す

存松老細川幽秋を市来に
送り即ち鹿児島へ帰向ふ



返すも耻かしき人物哉と詞をはなちて稱歎せられたり是よりして久倍は京師浪華の御家老として　公邊の大事を掌り慶長五年八月終に上方にて病死せり久倍人と爲り寡慾にして私の利を計らずその上生財の道さへ賢かりしかば　君にもその公廉にして私なきの節操を御察し御勝手向の事任せられ諸所への御寄附領知の命まで久倍一判にて下されたる多し剩　公より神文感狀を賜り祁答院大村の地を增封し給ひけるとぞ見えたりける且久倍の祖大隅助久といひしは道鑑公に仕へ軍奉行たりぞが持せられしといひ傳ふる軍幡一流あり黑餅に十文字を白書せしは見え殘りたれど五百歲の星霜を經てしゆゑ惣地の絹は蟬羽のやうに鬆くいたみて半ば切れすたりける幾ばくの戰場に雨雪を冒して猶今に存へしは珍しき舊物にてぞありける

搏虎實錄幷泗川大捷說

虎狩の事は釋文之が筆に備はりたれど其文雕龍にして實を失ふものあり今高原黑木の某が日記を取て左にふるす年號は文祿の年中に　忠恒樣十七歲の御年初て御上洛被遊候栗野御城を御打立被成候日州赤江の川より御船に召則御出船被成候豐後地に御着被遊候いわうとを御渡し島尻と申處に御着被成候次日御出船にて於富と申瀨戶を御上被成候其日はおんとの在所へ御着被成候三日御逗留候夫より御出船被遊於富瀨戶と申を御通り安藝の宮島へ御着被成候三日御滯留にて御出船被遊日數十日餘に大阪へ御着津被成候大阪は天野屋恩齋と申町人の所へ御宿にて候半年計被成御座候其後御下知にて候哉堺の町林屋と申町人の所へ御宿被遊久敷御逗留候林屋處にて御疱瘡被成候御疱瘡も殊の外出來候得

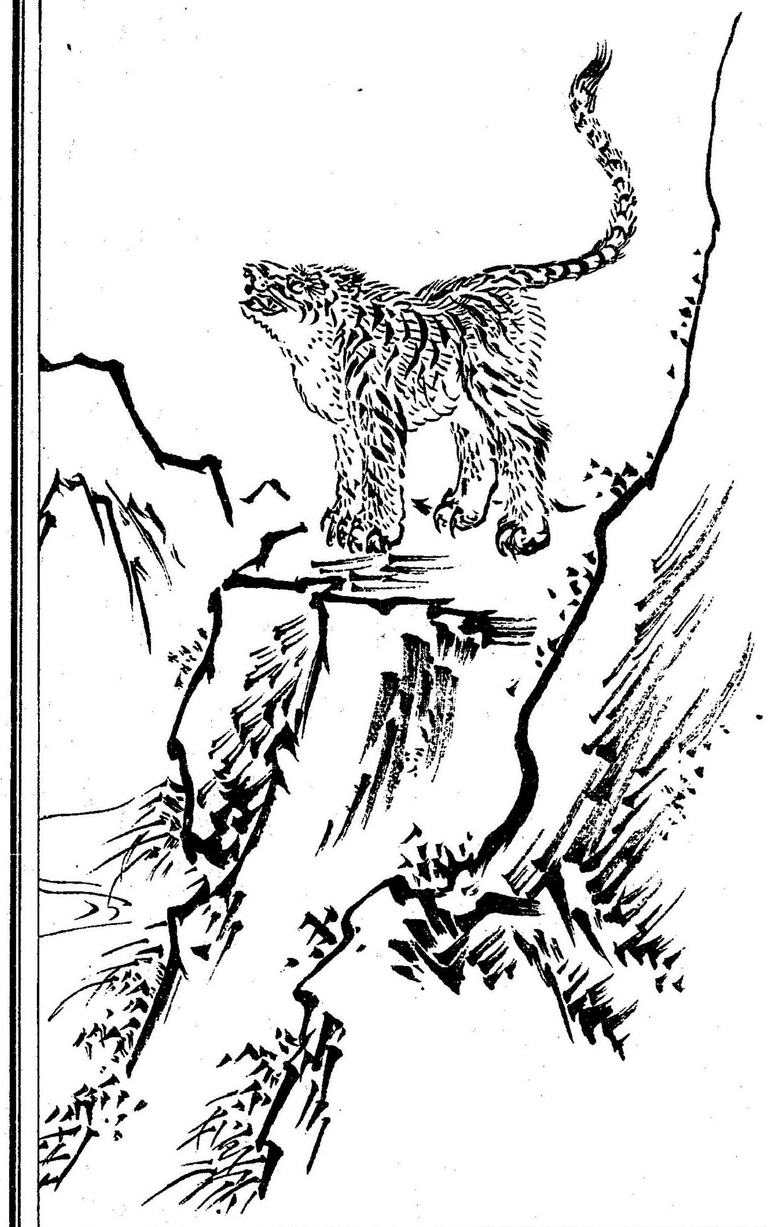
共御疱瘡能御座候て無程御快氣にて御湯被召候て未御さかやきも不被遊御疱瘡のどふも落不申候處京都より飛脚罷下御目得の物音御座候間早々御上洛可被遊由に候に付御上り被成候大阪より川船にて御登被成候京都へ次の日御着にて其頃は京都二條の御城松の丸と申所へ内裏と向合の馬場大名小路にて御座候上御屋敷は　龍伯様被成御座候御下屋敷と申は小川の方是には　惟新様奥方御座被成候下御屋敷へ御普請候て　忠恒様御座被成候然所に伏見より飛脚參り御目見得と御座候に付早々伏見へ御入可被成由申來候て夜がけに伏見へ御入被成未明に御三奉行石田治部少輔殿屋形にて上下被召列候て石田治部少輔殿御同道にて御登城被遊御仕合能御目見得相濟治部少輔殿と御同道にて御城を御立被成候其日京都の様に御上り被成候夫より無程御上様御緣與

御座候其年の暮方に大阪より御出船被遊高麗へ御渡海被成高麗唐島はふざんかい表より四十里餘御座候から島は北南と流れたる島にて候流れは十四五里と申候北の島崎は島津どの城を御取被成候南の島崎は福島太夫どの城を御取被成御座候其後從京都諸大名衆へ虎狩御當り被成候島津殿へも同前に御當りにて候頓て唐島より御出船被遊赤國の内茶わん山と申處にて虎がり被成候其日虎二ッとれ申候御狩の串目より内に入る人なし上下皆々かこひ被申居候虎居候山は三ッ四ッのうち一入高き山にて其山の折口より二三十間程串目より十二三間の内に　御兩殿様御馬にて平原へ御座被成候其日ことに霧ふり雨降申候其高き山は古野高すゝき所々に赤松御座候夏木山にて栗の木櫻の木檜木にて候其時　惟新様御意被成候は急ぎ使を以てそゝに心掛虎をにがし候はゞ双

方の間伏に則腹をきらせ可被成旨被仰出御使被遣候其使則
はせかへり御意の通銘々に申渡候由御返事被申上候其後又
々　惟新様御意被成候は薩摩者の事にて候間ふゝに心をか
け虎をにがし可申候間又使を被遣候て弓持は弓つるをはづ
し鐵炮持は火縄の火を消し能々見屈候て可參よし稠敷被仰
付候其後御使二時計に走歸り御意の通り銘々に申渡候由御
返事被申上候追て　惟新様御意被成候は雨降申に虎は出ま
じく候日暮に罷成候又々使被遣候得と被仰出候雨人被仰付
被參候そこ〳〵よりぬけて入可被申由被仰出候其御使二時
三時に罷歸り御意の通具さに申渡候由被申上候則御待被成
候得共何方よりもぬけて入不被申候間　惟新様大きに御腹
を御立被仰出候　忠恒様も御腹立被成被仰出候は皆々諸士
へ何とも居被申候得共一人も入る人無御座候御父子様御覽

被成被仰付候に人はなきのかとの御意にて候御口寫し上野
權右衞門と申仲間　忠恒様御馬の馬手の口をひかへ罷居候
權右衞門參候て虎を追出し申せと被成御意候畏ると申し御
馬の口をゆるし　御兩殿様御座候間右の串目につき上り高
き山の六分目程より横へ燒野を十二三間參候其時權右衞門
姿は見得不申候夫より高き古野の大すゝき原に入りすゝき
を分て參候にすゝきうごき申すを下より上下皆々御覽被成
すゝきの中を權右衞門十二三間參候時分に高き山のせんち
やうより虎權右衞門を見付高ごゑにていがみ申候事すさま
じく大地もゆるぐ計響き申候忽ち千丈の巖より下ざま一飛
に飛かゝり忽權右衞門をかみ殺し牙にかけ高すゝきより二
三尋上になげ上申候權右衞門地に落付申すと虎は又本のせ
んちやうに飛上り怒れる貌すさまじくその高さの間は百間

昌原の虎狩る舍人権右衛門虎を逐
出さんと荒野の芒を押分行る猛虎くら
の巖より大る猪く飛うく出権右衛門
の右眼を掛く切といへども終る虎の嚙
ひけらる



虎権右衛門を噛殺して本の子
丈の巌より一飛に躍上る残れども
権右衛門の刀創（カタはず）の血眼より入て狂
ひ廻り帖佐六七の股を噛を福
永助十郎長野六兵衛是を刺
留たり

は無相違有之に只一飛に飛上り申候扨虎權右衞門に飛懸り候時刀にて切わり候哉虎の右の眼眞中上唇に掛て切われ是に痛み居たるを續て一番に永野六兵衞馳着候て虎を刺留申候六七は虎に股を咬れ齒形四ッありて血は出ず四ッの齒痕より汁流れ申候扨權右衞門死骸を手輿に乘せ　御兩殿樣御前に被召寄御覽候得ば虎飛掛り咽を咬切れ居申候左候て權右衞門刀は鞘計腰にさし身は無之由を被申上候　御兩殿樣御愁歎被遊候と云々

文化の六とせ宮城邑主のをさめらるゝ朝鮮征伐の屛風の畫と搏虎の卷物とを看侍りし事の有りき明人の多き事は山谷に滿亘りて幾萬ひとゝ云事を志らずされど多くは甲冑を着すてきぬ蓋など云ものを指かざしつゝ所謂董一元が數日の勝に狃ひて掀髯いへらく疾雷不掩耳と吻せしがごとく吾君

の御勢をば只手捕にせんと搆へしといふが信なめり此時に泗川に籠らせ給ふ御方は籠中の鳥にも譬ふべく簀に入れし魚にも似つべくいづ地をさして泄れ出づべうも覺えず誠に危き御事はいふも更なるべしひとり御大將　義弘公謀を帷幄の中に廻らし勝ことを千里の外に決め玉ふる御氣色に諸人も恃み奉りて御下知をかしこみし有樣なるに折節赤白の兩狐水の手よりいでゝ明賊の藥櫃に火移り忽に徐の兵三千人は黑煙の中に焦死してけり機をうつさず東西の門より時の聲を作り掛攀を並べて突き出給ひしかば明賊共は唯あはてふためきつゝ我先にと逸足に逃出し侍りし程に一人して　は四人五人も賊を伐ふせ突殺し世に稀なる御勝利を得させ給ふる御事どもなか〳〵申も愚なるべし國柱故異稱日本傳等我　公の泗川の御戰に預れる事ども常に打誦んじて天の

明軍の上ニハ無數の小鳥群
り啄く明兵藥櫃を運び
我城を燒屠らんとす神狐
火を投一却て明人を釜にに

泗川新塞城の上ニは蒼飛
て天を蔽ふ嚢一神武の
皇弓ヨ靈鵄(アヤシキトビ)鴞止る
の瑞ふるべ一

唐人の虎を捕ふるハ
山中ヨリ穽(フトシアナ)を穿(ウガ)ち
その上ヨリ枯木を蔽ひ
犬をくゝりつけて雉(サクビ)
泣(ナカ)しむ

御たまのふゆを得給ふる事のかしこさをひとり思ひ合すとぞ感じ入り侍るなる虎狩の勢こそ殊にすさまじく其人々の鬢の毛のそゝけ衣の鶉毛なる御大將の衆と共に席を同くしてかの猛虎を二ッ獲物にし給ふる勇ましさは中々今の世の人の習ひ及ぶべき有樣にあらじあまたの年月戰場の業に馴れ給ひ人々も已れ獨りの働なきはあらじ主從只一身を働くがごとく勇み進みしよりぞかゝる勇ましき御擧止は侍りける近頃漂着の唐人共に唐山にて虎はいかゞしてやは捕へ候と問ひしに先虎住む山の邊に大に深き窪を堀り其上に枯木の薪柴を蓋ひそれに犬を括り付ておきける時其犬大に悲み叫ぶこと大方ならず虎は犬の啼聲を聞付て喜びつゝ山より下りて只一飛に犬を嚙んと飛つきたる時枯木の枝共折れて虎は窪の底に落入りぬる犬の啼聲の止むを相圖にして行きみれば果して虎は窪の底にたけり狂ひぬるを上より大木となく土となく落しかけて虎を埋め殺し取るとぞ語りける謀の賢きやうながら餌食にあへる犬のむざんなるその穴を堀るの費なるなど皇國人のわざに似氣なくこそ

高麗巫嫗

里諺に妬婦を燒餅と稱ふは胸の火むらを焦すといふ意にや又哲婦を高麗御子と云古へ神功皇后親ら戎衣して三韓を攻服玉ひし當時の事を魏志に日本の女王名は比彌古と云などあり是は日女尊の唐音假名なり因て女にして男の如く雄悍なるをかく綽名せりといふは全く誣ごとなり蓋妬婦の爲に身を縛らるゝ者は前世の宿冤なるに似たり其勇は三軍を駭するに足りても其威は房闥に行れず其智は六合に周くしても其術は紅粉に運らし難き者多し妬婦吾身の番人となるは

國分安樂某高麗より美女を列帰り某の妻嫉妬を

國分安樂某の高麗より
はき帰りし老媼と高
麗の物語を聞く

高麗の
饅櫃

實に人生の一大不幸と西土人も物し置けり國分の安樂某が先祖征韓に從軍しける當時九ヶ年の長陣なれば各朝鮮女を私娼などにせし事なり安樂某も朝鮮にて密妾とせしもの日本勢歸陣の時に臨み衣を攀て申けるは妾が親兄弟も年來の兵亂に蹤跡もれずなりぬ妾を跡に捨置れしとて何國に再び身を片付候べきあはれ日の本とやらへ召列れ給れと歎きけるにぞ列れて歸りける然にその妻極めて妬婦なれば某僞寄て朝鮮にて宿なし女が深く歎きぬるを是非なく列れ歸りたるなど慰めぬれどこの朝鮮女隼人の城下には双なき姿色あれば妬婦腹あしく罵りたつ故に某も爲すべきなく別室をこしらへて養ひ置ける女の朝鮮口は此間の者めづらしく韓さへづりと子共などは物笑ひせし程に妬婦の愛想なきさへあるにもらぬ火の心づくしに遙々と世をうみ渡りしかひもなきうらみにこそは沈みけれかくして後々は大和詞を稍ひ習ひ彼地の事さへ紡績の業とも話もし傳へつ老ぼれしまで存生て里人どもは高麗巫嫗とぞ稱へけるされば昔時　松齡公朝鮮歸降の者二十二姓男女八十餘人を率ゐ來り給ひしも半は本藩人が彼地にて生したる子供ありなどいひ傳ふるは安樂某が密妾の類にや明人が書きし平壤錄懲毖錄等の書にや征韓の事跡を載せし中彼の地の婦人女子供が日本人に汚されしと自縊自殺して貞節を守りし行狀傳あり此間の人記したるには曾て見聞ざる所なりこれも安樂某が妾のたぐひ世に傳らざりし事ども猶多かるべし輓近太閤眞顯記などの繪本册子世に梓行せしうち本藩の御事を著はしたるは皆かの明人の錄を本とし翻譯したる者ゆゑ事實齟齬し又は脫漏數多見えたり吾　侯新寨の一擧に明兵四萬人を鏖にし給ひ

その大捷に頼りて日本人難なく歸朝する事を得たるなど世の普くしらざるはいと口をしきわざなめり

山田有信辭羽柴秀長賜天草并島津忠隣殁根白坂之陣

山田有信は新助と稱す入道して理安と號せり其先高望王の孫利仁將軍の遠裔也　三位侯に奉仕して腹心股肱の親臣たり天正十五年四月六日豊太閤九州に攻入りける時有信が楯籠りける日州高城の城を其弟羽柴美濃守秀長二十萬の兵に將とし高城財部の近邊五十一ヶ所に陣を取て晝夜息をも繼がず攻たりしに有信は僅五百餘騎にて少しも辟易せず防戰ひし程に關東勢遂に之を拔くことあたはず然に　侯既に太閤と成を濟せ給ひ有信にも下城候へと仰遣されしかども有信敢て降らず敵兵疑ひを生じて又々合戰にも及ぶべきなど申ける因て再三に及び町田駿河久元をして命ありしかば有信始て從ひ奉る羽柴秀長有信が勇英卓越を感賞して肥後天草において四萬三千石を下さるべき間天下に御奉公すべしとの事なり自家の傳ふる所には賜新恩之地八百町之朱印と いへり有信申けるは不肖の某に過分の厚恩謝する所を知らず候然しながら天草一圓主人　義久領分にして下さるべしやと復けるに秀長よりさにては與へがたし　義久領地の外にして昵近となし召出され下さるべきとの事とありしかば有信對へて主人に引離ての御奉公に候はゞ幾度仰候とも堅く御斷り存候とて四萬三千石を塵芥とも顧みず御受申さゞりし人物なり

是より先天正六年の秋豊後の大友左衛門義鎮入道宗麟其の子新太郎義統伊東の加勢として豊肥筑の兵八萬人を相催し薩州へ發向し高城の四面を圍むこと三日なり秋七月三日の夜半に至り高城の諸將等相議して城を出て各別れ別れに落行ける中に有信大に喜びしと我先祖の紀百餘騎にて戰ひ見つけつ今は討死しも遺憾なしと當時も五百を繼べき者は十一月朔日惟新公の先陣本田因幡守親治以下援軍とし戰死を遂しかば有信高城を持ちこたへ終に大友の軍をやぶりけるしかく

忠膽義肝の志を　侯にも深く思召取り給ひければ慶長十四年六月十四日有信六十一にて簀を換られしかば國分龍昌寺に葬りなんとしける時故(ユヘ)とその棺槨(ヒツキ)をば隼人城の橋の上に迎へ給ひ　侯自から出臨給ひて理安に焚香なし下され一首の和歌を御手向下されける

夫れ理安慶哲居士は山田越前にてたけき心を專とし疵をかうぶり名のほまれあることたび〳〵なり然に忠節の者なれば内外をいはず召仕へしに予五三年の間心地例ならずおこたる事なきを歎き身のかはりにならんといひけるがまことなるかな夏のはじめつかたより病の床にふしみな月十四日身まかりぬと聞て不便さのあまり一首をつられ手向とするものになん

法印龍伯

蓮葉のおきこぼしたる露の玉の
　をはりやきみがためにすてけん

山人竊に謂らく理安居士其如何なる佳士とか見るべき世人特に高城力戰の功を稱して其高義の金石を貫きて動くべからざるを知るもの少し後世利達に競ひ功名を望むの風習よりして視むには理安の進退みづから少小に安んじて可惜(アタラ)四萬石を取放せしとや申べき然れども君臣の間は名分の大義をもて繼ぎ持てり人倫の道はこの大義を明にして天下後世に則るべきより大なるはなし叔季堂々たる儒臣すら猶恩を遺(ワス)れ義に負き時に趨り祿を保ち自ら孔孟の道統爰に存すと落着し墨痕詩賦に夸毗(ホコリメカフ)俗人無識の輩をして驚嗟羨伏(オドロキホメウラヤミカシコマル)せしめ暗に趙孟頫の涎を嘗るに似て竊に有知者の爲に譏笑せらるゝを顧ざる者あり亦何の心ぞや吾友嘗て浪華の中井履軒に

見えて曰先生何爲ぞや今の盛時に丁て二佰苞の美祿を辭して營々たる市井に零沒せんと欲するや履軒答て曰夫れ萬鍾の祿千繫の駟皆人の欲する處我豈之を避けて一書厨の蠹魚と葱の菜を喫ふも此身恙なく吾心樂めり況や祿々二百俵の爲に明々たる兩眼豈に瞽す事をなすべきやと大笑しけるとかや秀長有信が忠勇絶倫なるを奇賞して一朝に四萬三千石の利を以て之を膝下に誘んとす有信義を守て利に回ず秀長愈々其節操を潔しとして終に屈服せしむる事を得ざるなり此時若有信忽に利を見て義を忘れ秀長徽辟の命に從はゞ必ず有信を匹夫の勇とし又我藩其人なきを察せるや窮殲す事小田原北條氏が如く爵邑本に復すること或はなうして他日四萬三千石の爲に大方の恥辱を招かんも亦量るべからず

故に賢者は必ず其常を執て變に應ずることをなす彼外觀を專とし富貴に誇るものは殆ど哉理安の秀長に復命する遠き慮ありといふべきなり而して理安の後竟に血胤を絶てり天も識る事なきにや

島津三郎次郎忠隣と申は薩摩守義虎の次男にて金吾歳久主の養子なり生年十九歳の若大將にて容貌魁偉勇略衆に秀でたり天正十五年四月十七日と申に日州表の總大將大和大納言秀長の先陣宮部善祥坊が根白坂の堅陣に面もふらず無二無三に駈入て防ぎ戰はれけるに敵霰の飛ぶが如く四方より打かけし鐵炮の彈忠隣の鞍の前輪より後へつと射透して左右の股より沃いづる血瀧のごとし忠隣家來の鎌田囚獄左衞門へ水飲せよと申さる囚獄左衞門畏り候いかに座在すと申もあへず側なる青梅を枝ながら手折てまゐらせければ一口

羽柴美濃守
五十一ヶ所の砦を
構へ高城を
攻囲む

島津忠隣
鎌田囚獄左衛門

嚙破て其の儘息絶へ討死せりかく忠隣烈しき防戰に雲霞の如く寄せかけたる上方勢も進みかねて猶豫ける總大將秀長既に耳川を渡して二の目の合戰を始むべしと下知せらるゝに尾藤甚左衞門諫めて申けるは今朝より島津か懸り口の合戰は武田勝賴長篠柵破りの勢に勝りて候大將のかゝる時に麁忽に掛り給ふものならずと馬の轡を引留めける夫れ故宰相侯も徐々と師を振て飯野の樣に引返し給ふ忠隣踏留りて無二の戰死なくんば寔に大事の軍なるべし（此時侯夜討に懸給ひしに善祥坊其機を察して一陣を全うして防ぎける惣軍大敗及ばざりしかば今に一陣たりて遲近に物を仕合たるを善祥坊何せしとの諺は出來けりとぞ）此時の軍の次第は間斷なし事も多けれども他國人の實錄あるをば採りて左方に載せぬ龜井武藏守物語に曰天正十五年三月秀吉筑紫へ御動座島津を御攻被成候搦手の大和大納言秀長近江中納言秀次八萬にて島津義弘同家久兄弟が二萬餘豐後府内より日向の縣へ還り薩摩へ引取候跡を追て亂入高城財部の兩城を取卷き攻給ふ附城五十一ケ所其内耳川を越て根白と云所に取出を搆へ宮部善祥坊繼潤木下平太夫定基龜井新十郎廣政垣屋隱岐守光成福原右馬介直高一萬五千にて陣取て島津出張の口を押へ申候四月十七日朝島津義弘より使來りて曰高城に籠り候士卒御助被下候はゞ城を明渡可申となり此段五十丁隔たる大納言殿へ申遣し從是御返事可申とて使者を戻す宮部善祥坊は島津使者の樣子にて今夕夜討可有事を見知り人足千人山々へ遣はし竹木を伐寄せ陣の前に深さ二間幅三間のから堀を掘り其岸に彼竹木にて柵を振り自身も士卒も物具して待かけ候其外は外聞の者段々出置候如案其夜の亥の刻島津義弘一萬六千にて根白の陣へ押寄申候兼て心得候故宮部善祥坊士卒へ先

立て木戸口へ走り向ひ一番鑓を合せ宮部善祥坊繼潤一番鑓と名乘る其手の兵田中九助其子彦六（後伊勢大納言殿へ仕る）半右衞門天田村太郎右衞門二番鑓を合せ防ぎ戰ふ垣屋隱岐守南條勘兵衞木下龜井福原の諸大將取合ひ身命を捨て防ぎ戰ふ島津義弘は元より剛將なり手づから鑓を提げ眞先に進んで攻懸り樺山平田伊集院石谷町田の本名等の兵共面もふらず柵に付て天地を響かし攻め戰ふ宮部一組の人々柵を隔てゝ鑓を取て防ぎ戰ひ兩手の手負死人將棊仆に異ならず島津が兵柵に附く事蟻のごとし堀にも透間なく込入り攻め戰ふ善祥坊時分は能きぞと控の繩を切て柵を堀の上へ押倒す柵に付きたる兵も堀の內の兵も皆柵の下に押付られ死するもの八百餘人なり宮部一組の兵共柵を倒して內の柵へ引籠り島津が兵共柵を渡り味方の死人の上を走渡り內柵を攻破り十七夜の寅の刻に三ノ丸二ノ丸揉み破りしかば善祥坊を始め本丸へ引籠り命を惜まず防ぎ戰ふ夜已に明て十八日の朝なり義弘彌攻詰めて難儀に及べば大和大納言秀長卿は五十丁隔て居給ひしが三萬計にて耳川の端まで推來りて見渡せば根白の峠は義弘が軍兵雲霞の如く取かこみ鐵炮矢叫の音鬨の聲相交りて天地も響く計なり秀長見給ひて只今善祥坊一組被二打干一と見えたり耳川を渡して後詰せんと馬を川へ打入れ給ふ尾藤左衞門知定馬より飛下り秀長の馬の口にすがり今義弘が勢を見るに武田四郎勝賴長篠の掛口に異ならず此強の鑓先には闕白樣も恐らくは叶ふべからず必ず川を御越不可有と諫め申候藤堂佐渡守高虎は手勢引連れ川を越して搦手より根白の寨へ駈入り善祥坊に力を合せ高虎も手自ら突倒しけれども義弘彌かゝりて揉にもみて攻懸る善祥

坊一組も防兼て見得候黒田如水其子甲斐長政は秀長卿の進み給はざるを見て手勢計にて進み行く村上彦右衛門を遣し根白取手へ懸付只今大和大納言殿六萬にて助け來り給ふぞと呼はらせける故取手の中噇（ドッ）と勢ひ出しける如水長政父子共に耳川を渡りける栗山備後守利安先陣に渡す後藤又兵衛政次毛利但馬衣笠因幡竹野石見井上周防打入り〳〵乘渡し義弘が陣へ切てかゝる秀長卿の御内羽田長門守千餘騎同耳川を渡して黒田に先立んと鑓を入る根白の取手是又利を得て突て出て相戰ふ此時小早川隆景二里阻てゝ陣取ける根白の急を聞て三千餘にて耳川の端迄押來る大和大納言殿見給ひて今我川を渡り島津を攻んと存ずれども大將同心不仕候いかゞ可有と談合有り隆景笑て答へ不被申隆景家老伯耆守就遠浦兵部宗勝背破具足の古物具にて大納言殿御馬の前へ出て島津は今日の珍客にて懇に問來り候此方亭主にて候に迎に出て見廻の一禮なからんや御相談も事に依り候と不憚申上る去れども秀長卿尾藤を始め何れも皆々進み兼候ゆゑ伯耆守兵部も則馬に打乘て川を越て乘渡し隆景旗を進めて三千餘耳川を渡して義弘が跡を切んと進まれける　義弘が甥島津三郎次郎忠隣踏留りて討死す其外七八百餘り究竟の兵共討れたり　義弘も根白の圍を解て引退き在々に火を掛け猪の猛る樣にして引取りける隆景如水使を秀長へ遣し義弘は一萬六千味方は八萬に及び候間鐵炮二三千挺にて左右の峯を嵩取り付送り大軍を以て追擊候はゞ　義弘を打取り直に鹿兒島へ突入可仕と頻に被申けれども尾藤右衛門時々諫め止めしかば　義弘は終に引入れけり頓て高城財部も落城せしかば彌鹿兒島さして推て行く　島津義久は惣大將

なれば肥後八代に陣取居しに日向の事を聞き是も鹿兒島へ引取けり下略

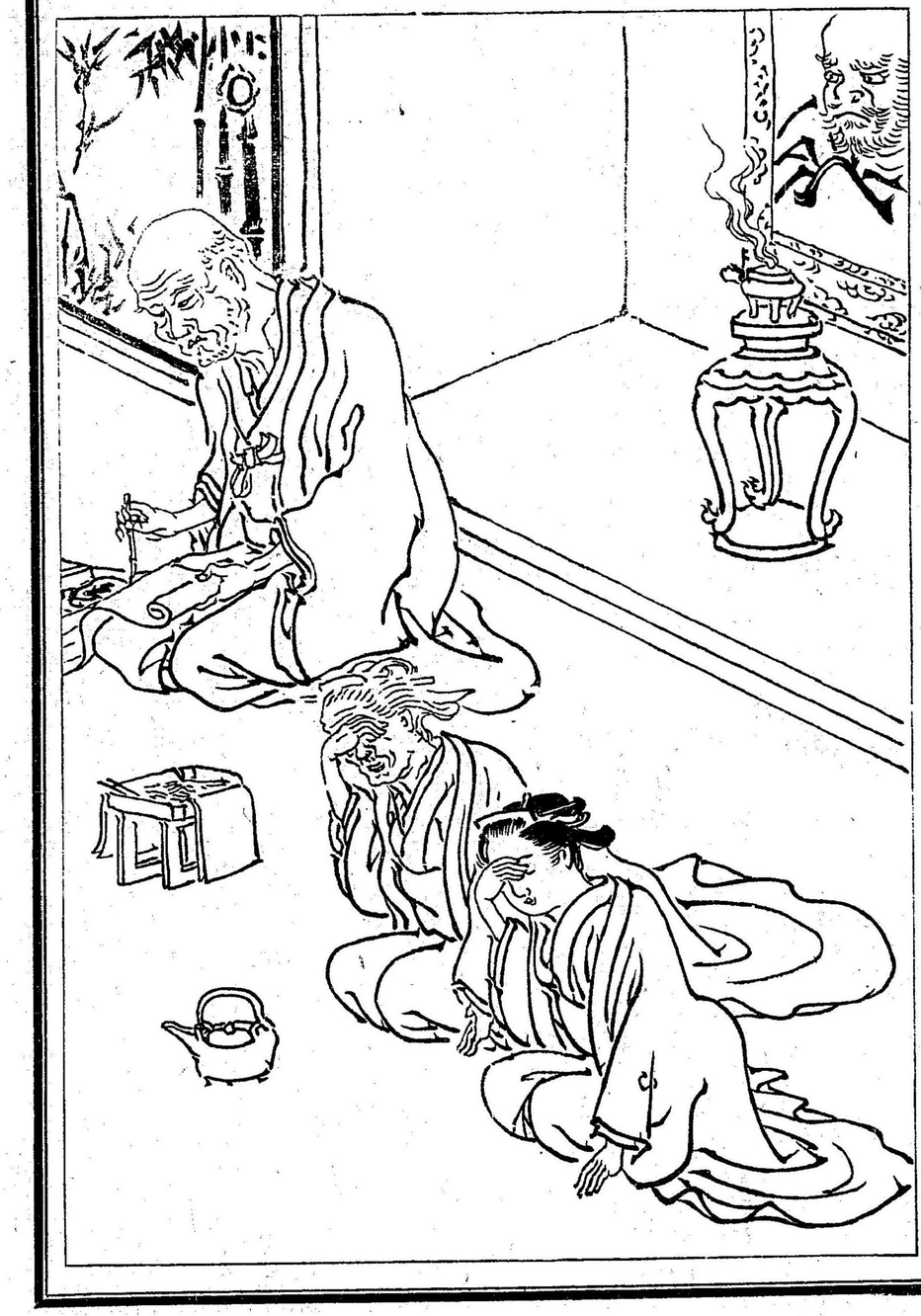
濱田榮臨殉死遺誡子孫ヲ

加治木日々記曰慶長十六年辛亥正月十日　惟新様餅飯田原へ御狩御鷹野へ御出被成候　龍伯様へ初野の鶉御進上被成候御使有馬奉膳兵衛尉同正月二十日辛酉　龍伯様御氣色爲可被成御覽　惟新様御内へ被成御參候正月二十一日壬戌龍伯様申刻に被遊御死去候正月二十二日濱田民部左衛門へ御小袖一つ幷に衣一つ被下候と有之右之外民部左衛門へ御前において御食被下候事共兩度有之皆殉死御暇乞の爲と相見得候

濱田民部左衛門經重入道榮臨は若年より度々の合戰に高名し武篇の聞え世人普く知る所なりき然るに後醍院喜兵衛淡路と改稱し後入道して淡齋と號せしもの元來は西征將軍の宮の皇族にて　惟新公朝鮮御歸朝の時より御當家へ仕へ奉りける或時　惟新公帖佐建昌の城下餅飯田原にて御鷹野遊ばされ淡齋嫡子高橋少三郎も御供にて候ひしが　殿様根白坂の方を眉影をさして遙に御眺め被遊しに老人一人田馬に草鞍負せて打乘參り乃て下馬して跪きぬれば　殿様殊の外御叮嚀に御詞を掛させられ候に付右の老人申上候は餘り久々富隈へ參上不得仕無心許候程に今日は　龍伯様へ奉伺御機嫌度罷越候と申候得ば　公も嘸御悦び被遊べし歸りには必ず立寄候得といと御懇に仰下されたり此時少三郎御側衆へ向ひ自らは新參にて今の老翁誰とも存じ知らず候何某と申方にて候哉と尋れたるを御側衆あれは濱田民部左衛門と申人にて候者をと答へければ少三郎打聞き興醒め貌にて居

たりしが御供仕り歸宅候て父の淡齋に物語けるは今日は餅飯田原にて濱田民部左衞門殿に逢ひ申て候渠は武勇世に勝れ候故太閤までも御存知遊されし程の高名の武士にて候に今老ぼれての後痩たる馬に窶しき衣きて引通られしを見て候あれ程武功の士さへ今の如くに候得ば我々づれ御當家に仕へても所詮世に立つ事はあり難かるべく候なり無功の某などは耻敷こそ候へと夫れより御家を御暇申て因幡鳥取へ笈仕し今以て松平相摸守樣へ物頭格の勤いたし世々高橋名字にて後醍院の嫡家たり淡齋二男藏之助は武藝も飽まで仕おほせながら風雅の道にも携はり謠好にて夜晝となくうたひける程にふる上人などゝ謙る族も多かりき扨慶長五年合戰より六年目　惟新公七十餘の御年まで折節吉野群の岡に御登り安きにも危きをな忘れぞとて軍陣の調練を御講じ遊ばされ一とせ御馬に是迄の御名殘とて御上らせ被遊しかばいづれも爰を晴れと馬鞍華やかに裝ひたち人まぜもせぬ顏つきして御供せしに藏之助は馬にも乘らず煤けたる野袴打着て上りしかば例の二才どもも見てとぬるき出立哉と半ば嘲り合けるさて群の岡御勢一度に乘りおろさせ給はんずる時藏之助袂より拳飯を取出しおのが馬に飼ふぞとみえしひらと飛乘り格を二ッ三ッ打つや否や眞先に群の岡を乘下して先陣せしかば今まで嘲り笑ひしものも流石は淡齋の子程ありしよなと舌ふるひしけるとぞ是は扨置濱田民部左衞門はさしもの數度の戰場に千辛萬苦を經しかども矍鑠の壯志老て益々止まず　龍伯公に殉死の御約束を申上慶長十六年子孫へ遺誡八ヶ條をいひ置に書付けるその文に曰

一御奉公の筋少しも氣任せ申間敷事



慶長十六年二月濱田民部
左衛門入道榮臨行年七拾
八才發明公の御為め殉死せん
とて辭世の歌を詠じ子
孫へ家に遺訓を貽す

一身の程を忘らて利口申間敷事
一腕立し上に目をつくべからざる事
一御役人中へ曾てそねみ申間敷事
一善惡の友達見合可申事
一大酒すまじき事
一念比の傍輩迚も內座へ入れ間敷事
一朋輩入魂の筋取分申間敷事

二月十六日

濱田民部左衞門入道判

と書置して今とし　龍伯公御他界被遊しかば七十八歲の鰓腹搔切てぞ御供申奉るとて辭世しける

ふたつなき命を君にたてまつる
こゝろのうちはすめる月かな

夫れ高祿美官は人の辭しがたき所大むね老ては猶餘財を貪り子孫の安富尊榮を謀り或は隱居して身を樂地に居しめなんと物せるは後の世の習なるべし榮臨入道若年にしては戰場に苦み老て猶瘦馬敝衣に安んじみづから足ることを知りて未曾ておのれの功に誇らず老らくの末がすゑまで子孫を戒むるの數言を留めて稀古の歲に及び君の御爲に從死して永訣（ケツ）の一首其心の明かなること猶皦（カヘ）日の如し世の高く性命を談じ生て世に功なく死して子孫に敎なきより是を視れば非常の人といふべきにやこの榮臨へ太閤殿下より拜領の鑓あり長さ一尺二寸計と見得たり又　惟新公御歌二首を珍襲す一首の御歌は御親筆

梓弓はる立よりも久方の
ひかり長閑けき花の色哉

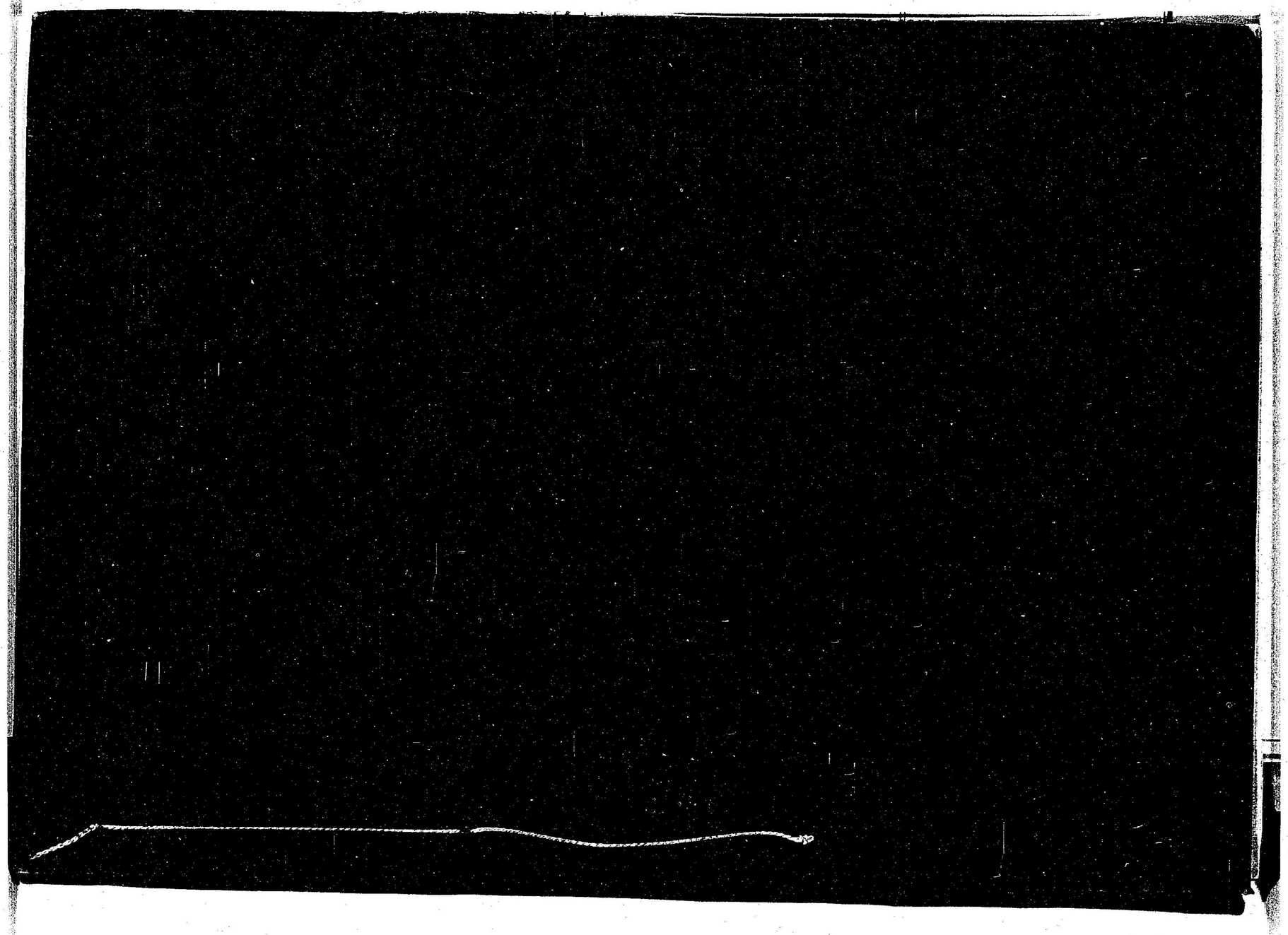
又一首他筆

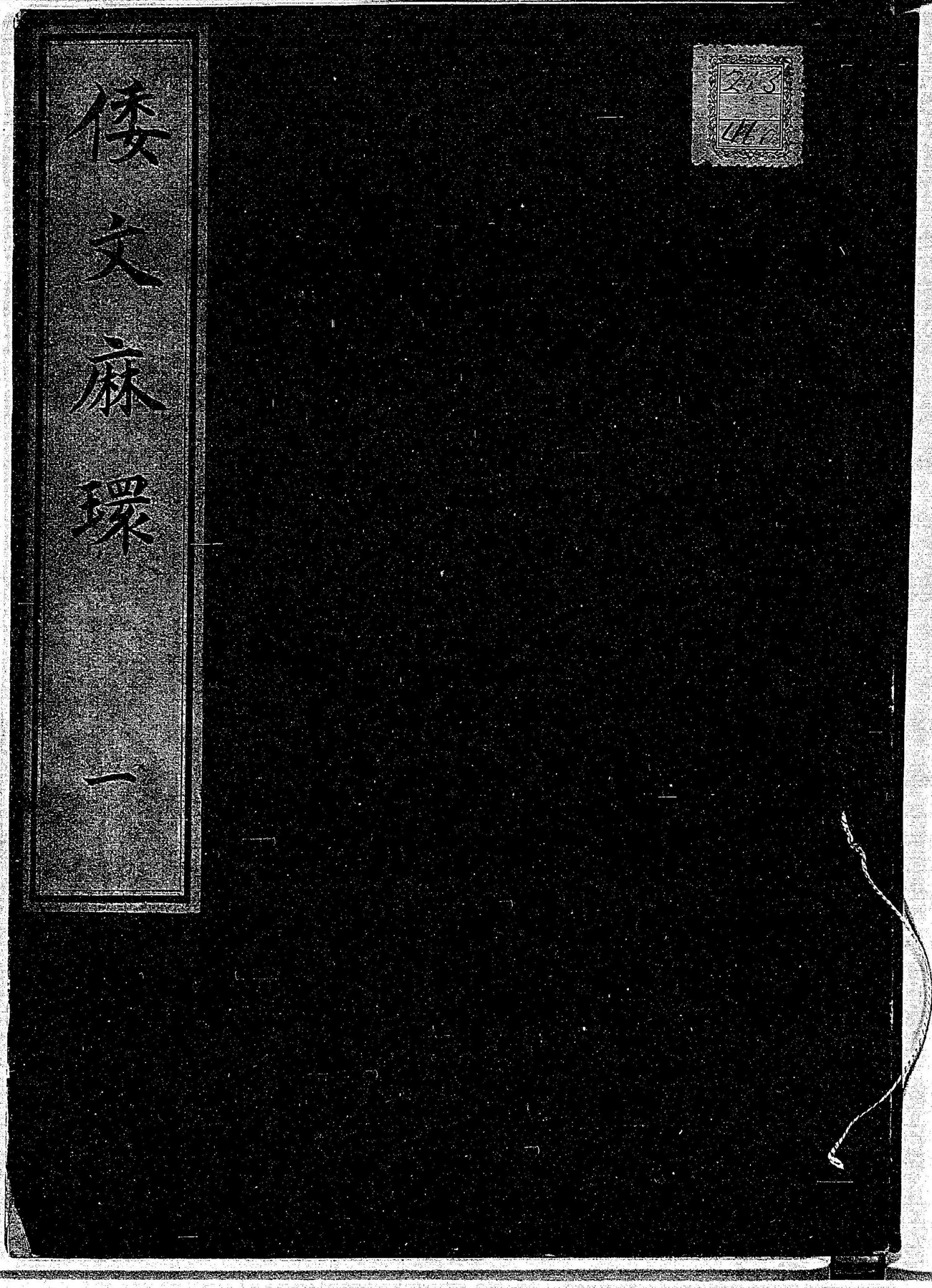
213
U60

人の上鏡にかけて見し咎の
我身の上になど曇るらん

始の御歌は優暢にして餘情かぎりなく後の御歌は自他を鏡
戒し給ふの秀逸にて誠に直人に御座まさぐりしかば其下に
事へ奉りし人々もおのづから榮臨ごときもの世に輩出し侍
りしにぞいと貴ふとき御事ぞかし

倭文麻環巻之二 終





213
460

102325-001-0

213-460

倭文麻環

白尾　国柱／著

M41

EAG-0151